

# 戦闘支

アオコ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——紅く揺らめくものが、肌を焦がし、熱く感じる。もうすぐでここも倒壊するだろう、と呑気なことを考える。前にも同じような事があった気がする——  
処女作です。ハーメルンをやっている知り合いに誘われて投稿してみることにしました。オリジナルです。十二支をモデルにした一応ファンタジーです。

# 目次

〈第零幕〉	〈第一幕〉一節	1
〈第一幕〉*一節	二節	5
〈第一幕〉三節		9
〈第一幕〉四節		14
〈第一幕〉五節		20
〈第一幕〉六節		23
〈第一幕〉第七節		28
〈第一幕〉第八節		33
〈第一幕〉第九節		38
〈第一幕〉第十節		42
〈第二幕〉第一節		52
〈第二幕〉第二節		55

〈第二幕〉第三節	60
〈第二幕〉第四節	64
〈第二幕〉第五節	70
〈第二幕〉第六節	77
〈第二幕〉第七節	84
〈第二幕〉八節	91
〈第二幕〉九節	98
〈第三幕〉一節	107
〈第三幕〉二節	112
〈第三幕〉三節	118
〈第三幕〉四節	130



# ＜第零幕＞

## ＜第一幕＞一節

### ＜第零幕＞

——紅く揺らめくものが、肌を焦がし、熱く感じる。もうすぐでここも倒壊するだろう、と呑気なことを考える。前にも同じような事があつた気がするが、そうなるこの死の淵を体験するのは二度目になるのだろう。やはり、怖いものだ。

喉がヒューと、汽笛のような音を立てる。そして、その音をかき消すかのように足音が近づき、目の前で立ち止まった。煙と血が遮る視界の中、それが何なのか、一体何者なのか、それだけがわかつた。

何か、は、そつと頬に触れ、削ぎ落とされた右耳をなぞり、手を離れたと思つたら、額に何かを当ててきた。固く冷たい、金属のようなもの。背筋が凍つたが、少し安心してしまつた自分がいた。楽にいけるのか——そう考えてしまつた自分に軽蔑の念がこみ上げてくる。

しかし、その固い何かは考えていたもの——銃ではなかつた。それはおそらく十字架の様な形に、文字が掘られているのだろうか、凹凸がある。

心当たりがあつた。

そつと目線をあげると、そこには、見知つた赤い髪と、赤い瞳が揺らいでいた。

「……なにを」

赤い瞳は悲しそうに、しかし、ルビーのように煌めいていた。そこから血で染まつた涙がこぼれ落ちる。

「……ごめんなさい……ごめんなさい、主……」

零れた雫が、白いブラウスに淡いシミをつくる。赤い髪を撫でると尚も増えていく。「泣くな……大丈夫だから、な……」

笑つてみるものの、涙は止まらずに、更に溢れ出す。どうしたものか、と考えていると、突然視界が暗転した。

「……主、どうか、お許しください。これが私の出来る最上のことなのです……」

すると、額に当ててあつた金属が熱を持ち出した。

「……我、——使え——の——の元に——、叶え——。我が名は、——」  
足下が崩れ落ちる感覚と、同時にさつきまで感じていた熱も離れていく。いやな予感がする。

「——」

思い出した。

## ＜第一幕＞

—

布団をはね飛ばし、どことも言えない空間を凝視した。大量の寝汗がそれを物語るように、何か良くない夢を見た気分だった。目に入りそうになった汗を拭うと、べつたりとそれがまとわりつく。

朝日が机の上のパソコンのディスプレイに反射してチラチラと視線を泳がせる。目覚まし時計の針は、まだ六時半を指していた。

「……最悪」

早すぎる時間に起きたこと、寝起きが悪いこと、汗で気持ち悪いことは、全てその一言で解決する。

「……」

部屋を見渡すと、部屋の隅に追いやられた教科書で張り詰めたリュックが見つめ返す。

「……がつこう、行かなきゃ」

のそのそとベッドから這い出しフローリングに足をつくとき、ひんやりとした、無機物独特の感触が伝わってくる。再びベッドに倒れ込みそうになる体を、前に進んで諫める。

パジャマを、文字通り脱ぎ捨て紺を基調とした堅いブレザーに着替える。姿鏡の前に映る自身を見て、肩幅の合わないブレザーにため息をつく。白い靴下に、紺の上下、スカートと校章のついたブレザー。紺の襟口から若葉色のネクタイが覗く。高い位置のポニーテールと、その顔には不安そうな、不満そうな、無愛想な、透き通る乳白色の表情が浮かんでいる。

「シケた面」

姿鏡にプリーツスカートを翻し、寂しげなりユックを掴み取る。

ドアを開け放した途端に聞こえてくるテレビのニュースの音が、母親が起きていることを知らせる。朝ごはんの臭いに釣られるかのように階段を駆け下りた。

カーテンが揺れ、朝日が部屋を踊る。微睡んだ朝の部屋に、細く白い足がパジャマを蹴った。

数秒後に、ボタン、と玄関のドアが閉まる音がした。母子は言葉も交わさなかった。



# ＜第一幕＞＊一節 二節

## ＜第一幕＞

――

布団をはね飛ばし、どことも言えない空間を凝視した。大量の寝汗がそれを物語るように、何か良くない夢を見た気分だった。目に入りそうになった汗を拭うと、べったりとそれがまとわりつく。

朝日が机の上のパソコンのディスプレイに反射してチラチラと視線を泳がせる。目覚まし時計の針は、まだ六時半を指していた。

「…… 最悪」

早すぎる時間に起きたこと、寝起きが悪いこと、汗で気持ち悪いことは、全てその一言で解決する。

「……」

部屋を見渡すと、部屋の隅に追いやられた教科書で張り詰めたリュックが見つめ返す。

「…… がっこう、行かなきゃ」

のそのそとベッドから這い出しフローリングに足をつくると、ひんやりとした、無機物独特の感触が伝わってくる。再びベッドに倒れ込みそうになる体を、前に進んで諫める。

パジャマを、文字通り脱ぎ捨て紺を基調とした堅いブレザーに着替える。姿鏡の前に映る自身を見て、肩幅の合わないブレザーにため息をつく。白い靴下に、紺の上下、スカートと校章のついたブレザー。紺の襟口から若葉色のネクタイが覗く。高い位置のポニーテールと、その顔には不安そうな、不満そうな、無愛想な、透き通る乳白色の表情が浮かんでいる。

「シケた面」

姿鏡にプリーツスカートを翻し、寂しげなりユックを掴み取る。

ドアを開け放した途端に聞こえてくるテレビのニュースの音が、母親が起きていることを知らせる。朝ごはんの臭いに釣られるかのように階段を駆け下りた。

カーテンが揺れ、朝日が部屋を踊る。微睡んだ朝の部屋に、細く白い足がパジャマを蹴った。

数秒後に、ボタン、と玄関のドアが閉まる音がした。母子は言葉も交わさなかった。

通学路は数の住宅街を抜け、木々の葉で影る細い下り坂へと続く。細道を抜けると川を向こうに渡す小さな橋があり、開けた十字路のアスファルト舗装が街へと誘う。

既に近代化の進んだ都市には人が溢れ、朝の七時前だというのに沢山の雑音で溢れていた。

車のガスの排気音、鳴り響く靴底、電気ケーブルの唸る機械音、生物の鳴き声や話し声。人々の作り出す決して規則的でない騒音が、一つの音楽となって耳にまとわりつく。

普段と変わらない街道を、表情を変えず通りすぎる。彼女もまた、音楽団の一員となつて靴を踏み鳴らしていく。

街道を行き、しばらくすると遊歩道に出る。途端に広がる静けさがザワつく都会人の胸中を穏やかにさせる。しかし、彼女に至つては違った。彼女にとってこの静けさは、深淵の入口とも言えるのだ。

街道の道なりを、枷を引きずる思いで進む。自動車の作る風が右手をすり抜ける。光を透かして照葉樹の葉が透硝子のようだ。視界に映るそれは揺らめくたびに、風鈴を連想させる。ただ夏と違うのは日差しがこんなにも穏やかなことだ。

もうすぐで学校に着く。そんな思いからか、口の端から溜息を零す。同時に自身のスニーカーに目がつき、桃色の紙片が足下を埋めていることにも気がついた。思わず顔を

上げると、まだ幹の細い桜を両側に控えた厳格な門が、彼女を迎え入れようと大口を開いていた。そして、桃色の紙片が紙でないことを嫌でも理解させられる。

またこの季節がやってきた。足を前に出すたびに吐き気がする。

高校生活二度目の春。彼女をからかうように桜吹雪が毛先を掴み、靡かせる。

何度目かの溜息と同時に、イヤホンで縛られたスマートフォンを取り出す。イヤホンで栓をして、自分の殻に閉じこもるように目を閉じる。

再び目を開けても景色は変わっていない。しかし、あの静けさがポップな音楽になった。それだけでも、充分だ。

二メートルもない鈍色の門を抜け、薄汚れた、廃墟のような校舎へと足早に向かう。いつもの場所へ、お気に入りの場所へ、何か怪物を恐れるように。そうしないと学校から逃げ出してしまいそうだった。逃げて、居場所はどこにもないと言うのに。

十分早く学校に着いただけというのに、校舎にはまるで人気を感じられなかった。

## ＜第一幕＞三節

## — 3 —

少し重みのある扉が、軋みながらも弧を描いてゆつくりと開く。誰もいない部屋から、古紙と沈丁花（じんちようげ）の香りが出迎える。太陽の光で寂れた鶺鴒色（ときいろ）になったカーテンに中庭のシルエツトが見えた。イヤホンを外すと、一瞬の耳鳴りに続いて、静寂と、自然の音が囁く。心地よい空間が生み出されているのだ、と彼女は深呼吸でそれを確かめた。

松の香りのする本棚に吸われるように近寄り、ハードカバーの一冊を手取る。

臍脂に近い色をした表紙に金文字がはめ込まれ、金色をなぞると、凹凸が指先に敏感に感じられた。

脇にその一冊を抱えて、窓際に並べられた机に付属している席につく。どさり、と鞆を投げるように傍らに落とす、本を机の上に静かに置いた。

硬い表紙を薄氷を触るように、丁寧に開く。表紙と同じ色をした厚紙が顔を出す。それを過ぎると、タイトルも項目も無しに黒い小さな文字が現れた。右から縦に蟻が行列

を作るようにして、びっしりと敷き詰められたそれは、常人なら目眩を起すような並び方だが、彼女は目眩以前に、気分の高揚を覚えた。人は、誰でも新しい発見をする興奮するものであり、好奇心を擽られ、ついその先へ進もうとする。彼女もまた、その一人だった。

文字をひとつ、行をひとつ、一ページ読む事に本の中へ溶け込んでいく。ここが何処で、今が何時なのか、そんなことは頭の中から墜ちていた。ただ眼中には、本を読むことと、その楽しさしか入っていない。

時計の針の音も、自身の鼓動も聞こえなくなつた。集中は頂点に登り、もはや本を読むことしか出来ないロボットのようだった。その興奮を途切れさせたのは扉の軋む音。

「っー」

思わず立ち上がり、扉を振り返る。しかし、そこには誰もいない。あつたのは、扉がゆっくりと名残惜しそうに動いている様だけだった。

私を見て逃げたのかもしれない。そう思ったが、後ろ姿だけで誰か分かるなんて相当ないだろう。特に、彼女を知っている人が少ないのだから、そんなこと自体少ない。そもそも、その知り合いたちが彼女だとわかつたなら遠慮無しに近づくはずだ。

ならば、先生達？

その可能性は充分に有り得る。しかし、それならば何故声をかけないのか。

「……」

おかしい。

そもそも、この時間にここに足繁く通う人間は彼女と司書ぐらいだ。それに早朝から図書館、しかも校舎の端にわざわざ来る人間自体がない。そして、ここが開いてるなんてことは、彼女と司書以外誰も知らないはずだ。司書に直接、そう聞いたのだから間違いは無いだろう。

だとしたら、司書か？ いや、司書なら挨拶ぐらいしてくるはずだ。

そうでないとしたら――。

背中をひんやりとしたものが撫でた。自然と背筋が伸び、息がだんだんと浅くなる。冷や汗がじんわりと出てくるのが感じられる。

未知の体験をしている。普段は高揚する気持ちだが、恐怖で雁字搦めにされて隠れてしまった。体の末端が震え、寒くもないのに、体の芯が冷えきっているように感じる。

もし、生徒でも、教諭でも、司書でもないとしたら。それはどこの誰とも知り得ない赤の他人、つまりは変出者だ。そしてそうでもないとしたら。

人間でない、科学を超越し得る人間以外の何かだ。

実際に、何かがある感じはするが、その何かがここに来るまで足音を聞いていない。本に集中していたこともあるが、全く聞こえないことは、それこそ有り得ないことだろう。

う。

——逃げなければ。

脳裏に浮かんだその言葉が、彼女の足を動かした。

鞆を置き去りにし、ゆつくりと出口へと向かう。出来るだけ静かに、出来るだけ早く。一分、二分、何分かかけてやつと逃げ道へとたどり着いた。

「……」

あとは、出るだけだ。

扉に向き治ろうとした瞬間。

Bannon!!

その扉が風を起こし、勢いよく閉まったのだ。もちろん外側からかもしれない。誰かがいたのかもしれない。しかし、それなら普通、閉めるはずがない。そして、この重い扉を、風が起きるほど早く閉めることが出来る人間は、絶対にいない。いるはずが無い。この扉には、騒音防止のため、ドアダンパーが取り付けられているのだから。

もはや答えは決まっている。こんなことが出来るのは、人じゃない。

思わず願ってしまう、生への足掻き。ついに四肢の震えが止まらなくなる。何か熱いものがこみ上げてきて、ひとつのことを連想させた。

死にたくない。



そう思った途端に、涙が零れた。そしてそれを起因として、次々に雫が溢れ出してくる。

止まらない願望に比例するように、涙の量は増すばかりだ。恐怖で声がすでに、救済を求める声は嗚咽となつて排出される。怖い、寂しい、悔しい。その気持ち、ぐるぐると体内を循環して涙となつて溢れ出ていく。

「どうして泣いておられるのですか？」

そしてそれを止めたのは、低く凜とした声音だった。

## &lt;第一幕&gt;四節

— 4 —

驚き振り向くと、そこには彼女よりも二十センチほど背の高い、藍鼠色の髪をした青年が立っていた。黒い外套の裾を床につけ、水浅葱の瞳を真っ直ぐと彼女に注ぎ、そこに悲しみを据えている。そして、唐突に目を細め、不穏な笑みを一瞬浮かべた。

「.: : やはり」

「.: : な、あ、あなた.: :」

非現実を目前に脳の理解が追いつかない。どんな言葉を発せばいいのか、どんな顔をすればいいのか分からなかった。

体から力が抜け、膝が折れる。そんな彼女を見て、青年が可笑しそうに口元を緩めた。「卯の主上は、下僕に似て臆病でいらつしやる」

クスクスと笑う青年に、彼女は反応を返すことが出来ない。

「さあ、お立ちください。そんな穢れた場所に腰を下ろしては、さぞお辛いでしょう」

青年が、青白く、細い腕を差し出した。

まじまじとそれを見つめ、青年と交互に視線を移す。そんな彼女に、青年は目を細め、口角を上げる。どこか不自然な笑みに、違和感を覚えた。それは恐怖からではなく、本能的なもので。

「…ありがとう」

手を取らずに腰を浮かせる彼女に、青年は見るからに怪訝にし、ゆつくりとその右手を下ろした。

「…まあ、いいですけど」

立ち上がった彼女を一瞥した青年は、机に置き去りにされた臙脂色の本を手取る。

「卯の主上は読書家のようですね。こんなに難しい本を読んでいるなんて…」

分厚くかなり重いそれを、青白く細い腕で軽々と片手で持ち、そのまま本を読む。その姿は優美で、絵になる。

「…哲学書なんて。下らない」

本を閉じ、視線を彼女に戻す。

「しかし、私の主と違って読書家というのは、卯の子が羨ましい。卯の子は本当に恵まれている」

彼女は瞳に警戒心を顕に青年を見つめていた。薄く微笑む彼に心を開く気配がない。

「そんなに警戒しなくとも良いと思うのですけどね。そんな所も下僕にそっくりと

は……」

青年は淡々と喋っていたが、それも止まり、空間が止まったような静寂が訪れた。しかし、彼女の思考は決して止まらない。

あの綺麗な青年は一体誰なのか、何者なのか。そしてここから脱出するにはどうすれば良いのか。そして彼は一体、何を喋っているのだろう……。

処理しなければいけないことは山程あったが、まずはここから出ることだ。そうすれば大丈夫。なんの根拠もなしに、彼女はそう考えた。

ゆつくりと後ずさり、後ろ手にドアノブの感触を探し、それを握る。

——よし。逃げろ——

ドアノブを勢いよく捻る。が。

「無駄ですよ」

ガチャリ、と、大きな音を立てただけで、ドアはびくともしなかった。そして、青年のクスクスという笑い声がまた聞こえてくる。彼女は眉間に眉をよせ、彼を睨めつけた。

「……何をしたの」

「何を、した？あなたをここに閉じ込めたのですよ。お分かりになりませんか？」

青年の端正な顔が楽しそうに緩む。こんな状況で無ければ彼女もそれが綺麗だと素

直に思えたが、今はただ醜くて仕方がなく思える。

「まあ、しいて言うならあなたに逃げられては困るので閉じ込めたのです」

「逃げられないため？」

「はい。逃げられるとこちらとしても少々手間が掛かりますから。出来るだけ神気はつかいたくありませんし」

「シンキ？さつきから…」

さつきから何を言っているんだ、こいつは。

彼女の頭は既にキャパオーバーに近づいていた。なんとかここから出る打開策が必要だが、ぼんぼんになった頭では何も考えられない。まずは状況把握をしなければならなかった。

「…いくつか質問をしていい？」

出来るだけ平静を装い、青年の目を真っ直ぐ見て話しかける。それに青年は、やはり楽しそうな顔で笑う。

「あなたが望むなら、好きなだけ」

取り敢えず了承を得たことに安堵し、再び口を開いた。

「…じゃあまず、貴方は誰。その髪色も目の色も、どう見ても日本人じゃないわ。それとも染めてる？」

青年は笑顔で答える。

「私は子の氏。この髪は元々の毛色です。私の毛並みがこの色でしたから」  
「毛並み？」

やはり、違和感をおぼえる。

普通、一般人は毛並みや毛色とは言わない。『地毛がこの色だ』というはずだ。余程の世間知らずなのか、それとも元来がこういう言葉遣いなのか。

「ええ。そして、私は日本人、だと思えます」

「だと思うって、なによそれ」

「私は日本人だと言えば嘘になります。では違うのかと問われればそれも嘘になります」

「… つまり？」

「つまり、私は日本人ではなく、そして日本人でもあるのです。実際に、私の出生は日本のはずですから。それに、貴方が日本人であるなら言葉も通じますしね」

「… そう」

青年が何を言っているのかはいまいちよく理解できないが、取り敢えず質問を続ける。

「じゃあ、さつきから言ってるアルジとかウノコとか、一体それは何？ 貴方の言うネノ

シって言うのも分からないし。名前がネノシなの？」

「えーっと、『子の氏』というのは役職の名前、と言うべきでしょうか。私の名前は主に付けて頂いた、『青祿（せいりく）』という字（あざな）です」

青祿は、そう言つて空中に青、祿、と文字を書いてみせた。

「字？」

「はい」

字は親や王様などの、自分の主人に付けてもらうものはずで、もう一つ、名があるはずだ。

「字じゃなくて、名前は？あるでしょ？」

彼女の質問に青祿の表情が徐々に曇つていき、無表情になつてしまった。

「え．．．」

「．．． 私には、子の氏になる前に沢山の名前があります」

「は」

「しかし、そのどれも私の名前じゃないのです。確かに呼ばれている私は子の氏ですが、青祿ではないのです」

## &lt;第一幕&gt;五節

— 5 —

「……」

重く分厚い沈黙が申し掛る。青祿の俯く姿につられて視線が下に落ちてしまう。

落ちた視線の先に、青年が映る。本当に細く、しかしその腕や足、身体にしなやかな筋肉が付いているのだろう。覗いた肌に薄く筋が見えている。モデル体型とは青祿の様な人のことを言うのだろう。

視線は無意識に下へ下へと更に落ち、最後には青祿の足元へとたどり着いた。

そしてそこで、再びあの違和感が襲う。

彼の立ち姿は端正な顔立ちに並び、とても綺麗だ。しかしそこには無類の違和感が立ち会っている。

第一に、彼の綺麗すぎる顔や姿は凡そ人とは思えないほどの美しさ。もはや芸術だと言つてもいい程だ。そして、彼女のことを知っているのが当たり前のような口調で話しかけてきて、彼女の学校に来て彼女に会っている。ストーカーの様なものなら待ち伏せをして後を付いてくることも出来る。実際に、学校に入ってからにはイヤホンをしていた



ため物音などは遮断されていた。学校からつけていたなら、尾行の可能性は充分に考えられる。しかし、いつもと投稿する時間が違うのに、待ち伏せなど上手くいくのだろうか。

どちらにしろ、無理矢理に理論付ければ可能だ。しかし、どうしても証明出来ないことが二つある。

一つはあの勢いよく閉まった扉だ。そして音もなく閉まっていた鍵。非科学的で、人の域を超える。

そしてもう一つは――

彼女が視線を上げると、そこには先程と変わらずに青緑が立っていた。違うところは、水浅葱の瞳から光の消え、不敵な笑みを浮かべ、こちらを見つめている事だった。

「っ!？」

一刻前までの穏やかな表情はどこかへ、代わりに殺気立った気味の悪い雰囲気が漂っている。

「……どうされました」

「いや……」

「ここで弱気になれば喰われると、彼女はあくまで落ち着いた振りをして見せた。

「質問は以上ですか？」

青祿の持つている臙脂の本に皺が走った。

彼女はその事に動揺しながらも彼を見据える。質問をしなければ、そんな気がした。しかし、これを聞いても良いのだろうか。これを聞いてしまえば、何か、何か不吉な気がする。本能が警告を鳴らしているような気がする。

それでも、と拳を握りしめる。

「……最後に、聞きたいことがある。正直に答えて」

「……私は今までも正直に話していたつもりですがねえ……」

冷や汗が額から目尻へ、目尻から頬へ伝つて落ちる。絞り出すような声で、自身でも驚く小さな声で、それを聞いた。

「あなたは……あなたは、本当に人間なの……？」

——証明出来ないもう一つの違和感。

それは、外套の裾から顔を出した靴らしきものが、地から数センチ浮いている事だ。臙脂の本が、音を立てて落とされた。

## ＜第一幕＞六節

6

青祿は口角を更に上げた。

その瞬間。

青祿の姿が空間に歪み、溶けだし、スライムのように形状を失くした。そうと思う間もなく、また形状を生み出し始める。それは、人形とも獣とも判然のつかない生き物へと変わっていく。

「な、なっ……!?!」

瞳孔の開いた彼女の視線を射止めたもの、それは、形容のできない、しかし青祿のように優美な獣だった。

人間の、青祿の輪郭や目鼻立ちは同じだが、彼の耳は大きく掌程の大きさであり、右耳に真珠のピアスが付けてある。そして瞳も柔らかな水浅葱から紅赤に、淡く透明だった藍鼠色の髪も、毛先は辛うじて残っていたが、あとは根元から目の覚める緋色に染まっていた。

胴には先程まで着ていた外套がなく、裸であったが、そんなことはもはや気にしてい

られない。青緑の肘から下、下腹部から下は人間のそれでは無かった。藍鼠と赤の毛が交差し、斑模様を生み出すその先に、人の頭蓋骨ほどの大きさの手。その手の先には赤黒く染まった鋭い爪。股の下から覗く蘇芳の、長くてらと光を反射するそれは、トカゲ、それよりも鼠の尻尾を思わせる。

あるはずの男性器もなく、胸には錆色で大きく「一」と書いてあり、その文字の中央上部に逆三角形の記号と、右胸中央に丸が描いてあった。

その姿は、いかにも異生物を思い浮かばせる。

開いた口の塞がらない彼女を見て、青緑——異様な生物は、クスリと笑った。

「ふふっ……その通りです。私は人間ではありませんよ」

尾を左右に揺らし、真つ直ぐと彼女に近づいてくる。自然と足が後ろに下がる。しかし、それも壁にぶつかり行き場を失くし、壁りへばりつく不格好な格好になった。

「どこへ逃げるというのです。逃げられる場所が貴方にはあるのですか？」

「……それ、れは」

それはどういう意味か、と問うことが畏怖と困惑で出来ない。小刻みに震える手足から力が抜けてくる。そんな彼女にお構い無しに青緑はさらに近づく。そして、ついに距離は目と鼻の先ほどまで縮まった。

「違いますか？ 貴方は親とも、学校でも上手くいかずに孤立している。貴方の居場所な

「……」  
「……」  
「……」

彼の言うことは確かに正しい。彼女は家庭で上手く言っておらず、数年前からろくに家族と口を聞いていない。話すとしても業務的な事ばかりで、他愛の無い話など双方共に決して切り出そうとしなかった。学校でも孤立していたことは間違いなく、虐められては居なかつたが、なにかとからかわれ、馬鹿にされ、クラスから蔑んだような視線を注がれる。担任は、毎回話題に昇ることが彼女がクラスに溶け込んでいる事だと勘違いし、彼女に話題を振る。そしてまたからかわれ、この輪廻が続く。

こんな日常のどこに心休まる日があつただろうか。誰に助けを求められるだろうか。どこに居場所があつただろうか。

彼女の思考ははずると紫紺に飲み込まれていく。

「貴方は誰にも必要とされたい。ならば、ここにいない必要も無いでしょう」  
自然と頷くように首が垂れる。

「消えてしまえばいいんですよ、ね。ここから、消えてしまえばいい。そうするにはどうすればいいのか」

彼から盛られる藍濁で、思考も停止直前だ。

「……どうすれば……」

「私に、私に身を委ねてください」

赤く斑の入った毛に覆われた青緑の手が、爪が、彼女の首をさする。

「逃げなくとも良いのです。私が、貴方に、安楽死を与えてさせあげますから」

「アンラクシ……」

「ええ、そうですとも——亜柏奏（あかしかなで）さん」

「っ！」

意識が水底から引つ張り上げられた。

「なぜ……名前を知っているの……！」

危うく、彼の甘美な口話術に操られる所だった。

彼の言葉は奏の思考に毒を塗り、悲しみを与え、氣力を抜き取る。しかし、残酷な言葉は、恐怖の最中にいた彼女には救いの糸のように感じたのだ。

名前を呼ばれた驚きと気味の悪さで、ぼんやりとした頭を叩き起すことが出来たが、それが無ければ。考えただけでも鳥肌が立つ。

奏は、斑の腕を掴み、彼を氣迫のある瞳で睨みつける。一瞬、彼が怯んだように見え  
た。

「……やはり、主ともなる方にこれ位では聞かないか」

「……さつきから何を言ってるか分からないけど、離してちょうだい」

しかし青祿は依然として首にかけた手を動かそうとしなかった。

「…」

奏は腕を掴んだ手にさらに力を加える。

「… 離して」

やはり青祿は動かない。

「… 離せ」

「…」

「離せと言っている」

「…」

「離せと言ってるんだ、この——」

奏の眼光が彼を射抜く。

「——バケモノ」

青祿を表すには、この言葉で充分だった。

## &lt;第一幕&gt; 第七節

「ガっ!？」

まさにその瞬間だった。視界がホワイトアウトし、チカチカと火花がちる。目の焦点が合わない。

青緑の斑の手が奏の首を絞める。急激に閉まる気道に、咳の混ざった短い呼吸が這い出でる。状況の理解できない脳は混乱し、その正体を押し退けようとするが、うんともしない。

「…くっ、あ、はっ…」

言葉を発せようにも息が足らずに、形にならず無残に散ってしまう。

「… 化け物と」

声のする方に焦点を合わせると、明らかに醜く歪んだ青緑の顔が奏を睨みつけていた。その眼光には憎しみが込められているようだ。

「私を、化け物と、呼ぶな…!!」

彼の瞳から血涙が流れ出す。同時に喉に赤黒い爪が食い込み朱の玉をつくる。

「っ!？」



「… 主の慈悲で生かしておこうと思つていましたが、やはり、殺しましょう」  
「… かっ…」

——殺す!?!——

自分から血の気が引くのが分かった。奏は手を振り払おうと、爪を立て、青祿の肩を押すが、またしてもびくりともしない。

次第に浅くなつていく呼吸と比例するように思考も鈍くなつていく。

「……く、あつ……」

それでも尚もがく様子に青祿は、顔を笑顔に歪ませる。

「苦しいですか? ですが、私はそれ以上の生き地獄を味わつてきたんです。何世紀も、何世代にも……」

どさり、と奏の体が崩れ落ちた。

「… つー!」

欠乏していた酸素が、急に供給され咳き込む。ヒューヒューと喉が鳴る。眼の前が赤く点滅していた。

「… な、んで……」

「… さあ、なんででしょう」

青祿は先程まで手にしていた臙脂の本を再び持ち上げる。

「例えば、貴方に幾らも恨めしい相手がいるとします。そしてある日、その方を殺すことの出来る好機が回ってきました」

青祿は臙脂の本を読んでいく。しかし、舌先からは言葉を零していった。

「そんなとき、貴方ならどうなさいますか?」

「ど、どうつ…て…?」

息継ぎの落ち着いてきた体をゆつくりと起こす。

「…私なら、そうですね」

振り向いた青祿の顔面には、満面の、それこそ輝くという形容詞の似合う笑みが貼り付けられていた。

「思いつきり、苦しんで死んでもらいたいですね」

手中の本が青い炎に包まれた。

「は」

最初、燃えているのは本だけだった。燃える本。なぜ本を燃やすのかが理解しようのない現象だったが、時間が経つにつれ段々と意味が分かってくる。

本からカーペットへ、カーペットから本棚へ――

――青祿はここを燃やすつもりなのだ!

「消せ!」

「…今更」

はつ、と青緑から視線を移すと、炎は既に奏の先まで迫っていた。

ぱちぱちと燃える紅が足元まで火の粉を運んでくる。熱い、しかし、冷や汗だろうものが頬を撫でた。

逃げ道はもはや後ろでのドアのみ。そのドアすら閉じられ今や万事休す。八方塞がりの中、自然と目の前の彼に意識が移る。

「…」

「そのような目で見ないでください。私だつて望んでこのようなやり方をしている訳ではありません。貴方が私を怒らせるのがいけないのですよ」

青緑の瞳が奏を捉える。その眼孔に吸い込まれるように、見開かれた目を彼女は凝視してしまふ。

「…一応言っておくわ。ここが火事になれば火災警報器が鳴つてすぐに人が来る。そうすれば貴方も私も何も出来ない。そして貴方は私を殺すことも出来ない。残念だったわね」

青緑は、きよとん、と首を傾けた。

「カサイケイホウキというのは、これですか？」

す、と青緑は右手を差し出した。

「え」

どこからでてきたのかその手の上には、普通天井に付いているはずのあの白い機械、その火災警報器が乗っていた。

青祿は相変わらずクスクスと笑う。

「これ、煙を感じして警報音を鳴らすのでしょうか？ おかしいとは思わなかったのですか？ こんなにこの部屋は、煙で満たされているのに」

そういえばそうだ。

奏の周りを囲むほどの炎。煙は天井についている。しかし、天井には白いあの機械はなく、代わりにむしり取られた跡が残っているだけだ。

「・・・」

「馬鹿ですねえ、思ったよりも」

青祿の血涙はいつの間にか止まり、代わりに奏の呼吸が浅くなっていた。部屋の酸素が薄くなっているのだろう。しかし、青祿は何の変化もなかった。

## ＜第一幕＞ 第八節

「…」

—もう、術がない。

曇ってくる思考に辛うじて浮かんだのは、死を意味する言葉だった。

熱くなる部屋に焦げ臭い空気が充満し、肺を焦がしていく。目眩がするくらいに酸欠に、頭が混乱して諾弱する。その中で青祿だけは、はつきりと輪郭を持ち、愉快だとも言いたそうにしている。

「… どうして、こんなことをするの」

喉が風音を出し、呼吸することすら危うい。そんな状態の奏に青祿は膝をついた。

「どうして、ですか？それは、貴方様が一番よく分かっているはずですよ」

穏やかな笑顔に怒りさえ感じてきたのだろうか、奏は眉を寄せて不機嫌になる。

「わかるわけ、ないでしょう。あなたの、思考回路なんて… 理解したくもない」

青祿の表情が引きつっていくのが分かった。

「… まったく、これだから…」

「は…?」

ブツブツと眩き、溜息を零したと思つた、その後。

「——いつ?!」

腹部に強い衝撃が走つた。何かと、焦点が合うのを待つと、明らかにおかしい状況が浮き彫りになる。いや、おかしくはないのだ。ただ、普通の日常にはありえないだけだ。

「……なにが」

腹に、何が、刺さっているんだ?

奥に業火が見える瞳が目の前に合つた。そしてそこからは、血が流れ出している。血涙だ。

こいつはなぜ泣いているのだろうか。と片隅に靄が生まれては、私は何をしているのだろうか。という別の靄が覆い尽くす。しかしそれ以前に、腹部から見えるコレがなにか、それが脳の半分近く占めていた。

「お前……」

口の端からたらりと、唾液の混ざつた赤い液体が顎へ伝う。

これは、青緑の、あの鉤爪の様な指が刺さっているんだ。

「……う、えあ、い、があああああつ?!」

意識が覚醒した途端に激しい熱と、痛みが精神を支配する。生理的な涙が流れ出し、



「え、いけませんよ」

赤く照り返す手首を掴んだのは、血が少し乾き血塊がついた毛皮に覆われた、青緑の手だった。

「せっかく綺麗でしたのに、私が手伝いますよ」

「い、いあだあつ……！」

青緑の鉤爪が、奏の細長い臓器を丁寧に掴み、引つ張り出す。慟哭のような叫びが響く。鬱陶しい水音と、ぷつりぷつりと細い血管がちぎれる音と一緒に、赤黒い小腸が顔を出す。鉄の匂いと、獣のような異臭で、奏は抑えきれず、胃液を吐瀉した。

「……ああ、ひどい格好ですね。もう少し言葉を選んでいれば楽に逝かせてあげましたのに」

青緑の手から、臓器が落ちた。べしやりと落ちた先には、ほとんど息をしていない奏の姿があった。視線は青緑を見ているものの、焦点は合っているかわからない。

「せめて、私も神に仕える支ですから、極楽へいけるよう願ってあげましょう」

青緑がにこりと笑う。しかし、奏の視覚では、黒い斑点が鼓動に合わせて増えていくばかりだ。

「さあ、心置き無く、死んでください」

青緑の手が奏の心臓目掛けて空間を割いた。奏もそれに合わせて目を閉じる。後悔



が、安心感が、とろりと溢れてくる。

——もう、死ねるのか。

青祿の爪が、奏の胸を貫く。

## &lt;第一幕&gt; 第九節

その瞬間だった。

「やめろ」

冷たく、しかしそれは幼い子供の声。

青緑の動きがピタリと止まった。

「……もう少しだったのですよ？なぜあなたは邪魔をするのです」

何かを引きずる音が近づいてくる。その音と同時にまた子供の声がある。

「お前こそ、私の主を毎回毎回殺して……私が始めるのがもう少し遅かったらどうしてくれるんだ」

青緑が振り向くと、そこには白い髪をサイドテールにして、白いブラウスに紺のスカートとベルトで止めた中学生ほどの少女が立っていた。その右手には一問より少し長めの鎌を持っており、桜色の瞳には明らかな殺意が浮いていた。

「手加減はしたみたいだが、やり方がちいと残酷すぎたな」

ゴキんと少女の首がなった。音に合わせて桜色の瞳が青緑と同じ紅赤に変わる。白髪も艶のある赤色へと変わる。

「随分長く寝ていたからな、力加減ができるか……」

吐き捨てるように言い、右手の鎌を軽々と振り回した。その度にバギ、ゴギ、と関節がなる。その様子を見て青祿が姿勢を低くする。

「まさか、私のことを殺そうなんて、考えていませんよね？」

少女はピタリと動きを止め、一度考えるような仕草を見せたが、顔を上げ、可愛らしい笑顔で答えた。

「……お前が悪い」

ぐん、と床が沈むと同時に少女の影が一瞬にして青祿の目の前に現れる。

「っー」

火の明かりが返される鎌が青祿めがけて下ろされる。ガゴンと大きな音と相応しい衝撃に、奏の体が揺すられる。灰煙が辺りに舞い煙幕に包まれたようになる。

手応えのない鎌を抜き上げ、肩に担ぎ、少女はポツリと呟いた。

「……逃がしたか」

そこで影が動いた。

少女の背後の煙を切り裂いて現れたのは、頭蓋骨ほどの掌。青祿のそれだ。その鉤爪が喉笛を切りさこうとヒュンと風音を立てて振り下ろされる。しかし、煙幕の晴れた先には少女の姿も奏の姿すらなく、そこにあるのは血海のみ。

「どいん…」

言葉を遮ったのは肉切り包丁で骨を断つような音。

「!!」

「…甘いんだよ、若造」

その正体は青緑の背後に回り込んだ少女の鎌だった。

煙が晴れたそこには黒く焦げた本棚や床、壁の一部。火はいつの間にか消され、代わりに水浸しになっている。そこに佇む青緑のすぐ後ろには、切り落とされたトカゲのうな尾が落ちていた。

「…な、なんてことをっ!」

青緑がバランスを崩し膝を折り座り込んだ。少女を睨めつけるが、その体は小刻みに震えて、額には脂汗が滲んでいた。少女はその小さくなつた獣を嘲笑うように見下した。

「お前が反撃なんてしてくるのが悪い。少し手を滑らしたただけだ。第一、最初に仕掛けたのは子の氏、お前だよ」

「だから、だからといって、尾を切るなんて、惨すぎる!」

「…惨い?」

いつの間にか白く滲み出した赤い髪を揺らし、少女はまだ魚のように動く尾を鎌で突

き刺した。鎌を刺すたびにザクリという音が響き、その度に青祿の顔が青くなる。そして青祿も人の姿に戻り始めていた。

少女は何度も鎌を振り下ろし、そして軽く笑った。

「……こうしてお前の尾が刻まれることが惨いというのなら、主の肝を引つ張り出されるのは惨くないのか？」

青祿は、はつとして顔を上げる。

「血涙を流し、化け物が化け物を殺そうとすることは、無抵抗な人を殺すことより惨いというのか!」

押し黙る青祿に白髪を翻し背を向け、図書室だった部屋の奥に進む。その先には、正反対の方向にあつたはずの奏の体が横たわっていた。

「私がお前の尾をわざわざ切り落としたのは、お前を殺さないようにするためだ……子供の氏は、尾に神経が通つていないのだろうか？確かに、体幹は失くすかもしれないが……それでも、内蔵を抉るより残酷か？」

「……」  
奏の横に屈みこみ、少女の小さな手が彼女の腹部にそつと触れる。

「……可哀想に。遅れて、申し訳ありません、主……」  
少女の手のひらから淡い光が溢れだしてきた。

## &lt;第一幕&gt; 第十節

少女の手が鳩尾からへそ下にかけて滑る。内蔵をそつと押し戻し、あるべき位置へ直す。次に、青緑の爪痕が残っている首に手を当てる。

「主……主……まだ逝つてはいけません。主……」

そう呟き手を離す。そうすると、手をかざした場所の怪我が治っていた。抉られた腹の傷さえも。

「主、独りは、もう嫌です……」

桜色の眼から雫が、頬を伝い、奏の服に染みを作る。次に、次にと染みは増える。

「……これで主が亡くなつてしまつたら、お前のせいだからな、子の氏」

先程までとはほど遠い、怒りの混ざつた声音で青緑に言い放つ。その先からは穏やかな、しかし殺気の隠せない返答が飛ばされる。

「そうしたら今度はどんなことをされるのでしようね」

「次は尻尾だけでなくその煩い言葉を紡ぐ唇を削いでやろう。それかその綺麗な顔の皮をすべて筆り取つてしまおうか？」

「怖いですねえ」

クツクツと喉を鳴らし笑った声の主は、すでにそこには居らず、今度こそ声すらしなくなつた。

「……地獄に墮ちろ、クソ鼠」

吐き捨てた少女の横で、奏の指がピクリと動いた。少女の瞳が輝き、見開かれる。

「主っ!」

顔を覗き込む様に背を丸め、奏の頬に手を置く。

すると、奏の瞼が開き、黒々とした瞳が力なく少女を捉えた。

「……な、にが」

朧気な視界が明確になつていき、少女の輪郭をはつきりと映す。

「……え、あ、あなただ」

「主っ!」

「誰」と言おうとした奏の言葉を遮り、少女がその身体に抱きつく。突然の出来事に対応しきれず、横たわつたままの奏は何も出来なかつた。

「あ、主い……」

嚙り泣く少女にされるがままになつていた奏だが、目線を下に移すと見える大量の血痕に、あの痛みが蘇ってきた。

「ひっ……い、やっ!!」

上にのしかかるさほど大きくない身体を退けようと全身に力を入れる。

「はなしてっ!」

「あ、だめですっ!」

少女は簡単に離れたが、起き上がろうとした身体に鋭い痛みが走る。

「っ!?!」

「主っ!」

痛みの原因の腹を抑える。が、しかしそこには原因のはずの大きな傷口がなく、ただ痛みだけがぐるぐると循環しているだけだった。

「な、なんで…!」

「まだ動いてはなりません」

細く白い手が奏の身体を支えようと手を伸ばすが、虚しくもそれは奏自身の手によって払われる。

「さ、さわるなっ!」

「っ…!」

奏の目には明らかな拒絶と憎悪が浮かんでいた。それも仕方が無いだろう。先の獣といい、知識が無いだけで恐怖を覚えるのは言わば生理現象だ。むしろ受け入れろという方が酷なのかもしれない。



「怖がらないでください。私は主のことをさつき先輩のように傷付いたりなど致しません。ですから、一度、落ち着いてください」

「あ、あなた誰なのよ、主とか、訳の分からない……いきなり、落ち着いてとか、言われたって、それに、私の怪我……」

奏は酷く意識が混濁しているようでも上手く会話すらできない状態のように見えた。これには困った、と少女も眉を下げる。

「……主……いえ、奏様。いきなりのご混乱されているのはわかります。ですが今一度、私めのお話を聞いていただけませんか？」

丁寧な口調に危機感が薄れたのか、奏の瞳は今度こそ少女をはつきりと捉え、まだおどおどしているが落ち着きはしたようだった。しかし、まだそわそわと何かを見ている。その視線を追うと、少女が振り回していた鉄黒い鎌が立て掛けてあった。

「ああ、あれが怖いのですね。少々お待ちを」

立ち上がり、鎌を持ち上げた少女は呪文のようなものを唱え始め、暫くすると、鎌は小さな光となり弾け飛んで消えてしまった。奏はその様子をぼかんと口を開けて見ていた。

「これでよろしいですか？」

にこりと笑う少女の顔を、奏はまじまじと信じられないというように見つめていた。

が、最終的には溜息混じりに、ええ、と答えた。

「えつと：。まず、あの鼠、あー：。青祿、でしたっけ。奴は居なくなつたので安心してください。それから、腹部の怪我と首についていた爪痕は見た目は綺麗になりましたが、治つてはいません。なのであまり触ったり、それこそ、先程みたいに思い切り動かれるとかなり痛いですよ。気を付けてくださいね」

驚きと呆れのあまり声が出ないため、首を縦に振ることしかできない。そんな奏の背に、少女の手がまわる。一瞬びくりと強ばつた表情を作つたが、背に腹は変えられない。素直にそこへ体重を預ける。そうすると、少女は彼女とは正反対に満面の笑顔を作る。

「…ごめんなさい」

「いいんですよ、これが私の役目でもあるので」

「…」

不思議、と言いたそうな顔の奏を少女は気にせず続ける。

「あと、私は：。卯の子と呼ばれています」

「ウノコ？」

「はい。あの獣は子の氏。それぞれ役職の名前のようなものです」

「はあ」

青祿も同じようなことをいつていたなあ、とぼんやり思い出し、そういえば青祿には

ちゃんと名前があつた、それもいくつもあつたということが浮かんでくる。そんなことを考えているうちに視界の端に少女の虚ろな表情が目につく。

「… どうしたの？」

「え」

どうやら自分では気づいていなかったらしく驚いた様に奏を見る。

「… どうか、しましたか？」

どうかしてたのはお前だ、という言葉を読み込み、奏はふと疑問に思ったことを質問する。

「あなた、名前は？せ、じゃない、子の氏？にはちゃんと『青祿』って名前があつたじゃない。あなたにはないの？」

「私の、名：？」

少女は考える素振りを見せたかと思うと、また虚ろな目をしてしまう。これでは雨後の筍だと質問を変える。

「あいつが言つてたんだけど、名前の代わりに字を貰うんでしょ？あなたも、あなた… えっと、シュジョウ？に貰えばいいんじゃない？」

「…」

すると少女の虚ろな目に再び光が戻り奏を見る。

「…では、付けてください」

「は？」

何を、と言いかけてはつとずる。そういえばこいつは私のことを『主』と呼んでいなかったか、記憶を辿れば蘇る忘れていたこと。

「付けて、頂けるのですよね」

「え、あ、あのね…」

取り敢えず少女に主なんて知らないと言えようとしたが、それを封じ、少女が先に口火を切る。

「あ、でもまだ天生していませんよね。すいません、少し待っていてください」

「テンセイ？」

また知らない単語が出てきたと思ったら、少女の胸から錆色、よりも少し明るい色の10センチ程の球体が物理的に出てきた。体の内側からというより、身体を空間として透き通って出てきたような感じがした。

「え…え？」

「さあ、あるじ、えー…奏様。力を抜いて、リラックス」

「り、は…？ええ？な、なに!？」

「大丈夫です。真の主なら苦しくありませんから」

「それはつまり9割以上の可能性で苦しいですってことよね!?」  
奏を無視して、球は少女によって奏の胸部の中心あたりに押し込まれる。

「いきますよ」

「や、やめっ…!」

思わず目を瞑り、手足に力が入る。そのせいで傷口があつた場所は痛い、この恐怖には勝てない。

しかし、苦しいどころか、暖かいものに包まれた感覚が襲う。全身が春風に包まれていけるような、包容をあまりなく感じているような、不思議な感覚が意識を奪う。気持ちが穏やかになり、身体が少し軽くなった気がした。

「…?」

そして、懐かしい。何故か、そう思う気持ちがあつた。

そつと目を開けると、そこには先と変わらず少女の端麗な顔があるだけだった。

「…やはり、貴方様が主なんですわね」

「…」

少女の恍惚とした表情に何故かつられて笑顔になる。

「さあ、名を」

少女が、支えにまわしていた手を離し、頭を垂れ、膝をつく。

「名を、主」

「…… どうしてそこまで名前にこだわるの？」

奏の間に少女は明るい声のトーンで返す。

「名を主から頂くことは、私達、支が忠誠を誓うことと同じなのですよ」

「そう、なの……」

不思議とすとんと腑に落ちた。

正直に、今日の朝からここまで起きたことはすべて信じられない。いきなり美少年が現れ、かと思つたらそれは獣に変わり、訳のわからないことを言いながら殺そうとする。目が覚めると、今度は知らない美少女が理由はわからないが慕い、自分の主だと言われ、名前までつけろと要求される。

勢いに任せてここまでできてしまったが、戻りたいと言えば嘘になる。かといって好んでこの夢の様な状況に居座りたいとは思わない。だが、ここは、現実に比べて、生きているという実感ができる。せつかく治療してくれたこの少女には悪いが、あの内蔵を引つ張り出される痛みは、もう二度とは御免だが、生きているという感じが強くした。灰色の学校生活で、無関心な親との生活で、疲れ果てていた。だから、この幻想の世界に留まりたいと思つた。

そして懐かしいと感じる、この感覚が幸せなような気がしてしょうがなかった。だか

ら。

「：： あなたの名前は、白兎（はくと）」

「：： はく、と」

「白兎と書いて、白兎。あなたの名前よ」

「：： 主っ」

抱きつく少女を受け止め、そのまま倒れる。慌ててる起きようとする少女の頭を優しく撫でると、起きようとした身体を戻し、しがみつくようにまた抱きついてくる。

「この白兎、主を必ず守ります、必ず、必ず。：：」

そう呟いた少女は小さく震え、嗚咽が聞こえる。また、あの懐かしさが押し寄せる。それに伴い睡魔が襲ってくる。それは暖かい少女の体温のせいか、それとも今までの疲労のせいか、そんなことはもうどうでもよかった。今はこの夢に浸りたい。

懐かしいと感じる、この感覚が幸せなような気がしてしょうがなかった。だから、名を呼んだ。口からすらりと出てきた言葉を少女に与えた。少女が泣くほど望んだその名前を。

数億回目の幕が開くとも知らずに。

## &lt;第二幕&gt; 第一節

もうどれくらい時間が経ったか分からない。薄らと開いた瞼から暗闇が飛び込んでくる。今が何時なのかは分からないが、取り敢えず夜だということが分かった。重たい身体を起こし、やにやらで開かない目を擦り、無理やり目を覚まそうとする。どうやら熟睡していたようで、身体中が軋み、関節が鳴る。こんなに眠れたのはいつぶりだろうか、ぼんやりと考える。

奏は、携帯を探そうと、暗闇を手探りで把握しようとする。その手になにか毛のようなものが指に絡まり、思わず手を引つ込めた。

「っ!!」

何かわからないそれをもう一度、手を伸ばし、今度は撫でてみる。先程はよく分からなかったが、それはふわりとした髪の毛で、少し暖かい。

——ああ、そうか

奏は、今日起こったことをじわじわと思出し、溜息をついた。その溜息は、決していつものような悩みからくるものではなく、敢えて言うなら安心感や、心地の良い疲れからついて出たものだろう。



ならば、ここにいるのは彼女しかない、と優しく名前を呼んだ。

「白兔……？」

少しぼんやりとした声で呼ぶと、ふわりとした髪の毛が動いた。目が闇に慣れてきたせいか、シルエツトはなんとなく分かる。そのシルエツトはこちらに近づき顔や手などを触ってきた。どうしたのだろうか、もう一度頭を撫でるとシルエツトは頭を下げ、もつと、というようにきゆうと喉を鳴らした。

「……主、夢では、ありませんよね？」

甘えてくる様子とは裏腹に不安に満ちた小さな声が闇に響いた。奏はその言葉が、自分が生きていることに対しての不安だろうと受け取り、自らの腹部を軽く押す。鈍い痛みが走り、あの痛みが嘘ではないということを確認める。

「……大丈夫、私は生きているから」

そう言つて頭を撫でると、シルエツトは安心したのか、また喉を鳴らす。よかった、と、返事をするように。

撫でる手を止め、今度はスマホを探す。寝るときはいつも枕元に置いてあるはずだし、しばらく探すが、ない。帰ってきた記憶が無いということは、スマホだつて触っていない。ならばカバンはあるはずだと、白兔が持つて帰つてきていることを信じ、ゆつくりと足を下ろす。

まずは電気だろうと、ドアの方により、電気のスイッチを探す。

よたよたと歩いていると、何かを蹴った。なんだろうと思いはしたが、構わずパチリとスイッチを入れた。

明かりがつくと、いつもの変わらない部屋が現れる。パソコンにクローゼット、姿鏡、目覚まし時計……。いつもと違うのは白兔がいることや、恐らく白兔が着替えさせてくれたのだろう血濡れの制服が落ちているところだろう。制服のスカートの部分は焦げていて、上のブレザーとカッターシャツは半分から下にかけて、破れている。これは買替える時言い訳なんて出来ない。

そしてもう一つ違う点があった。

先程蹴ったもの、それを見ると、そこには知らない男が雑魚寝していた。

## ＜第二幕＞ 第二節

「…え？」

動揺のあまり声が出ない、というのはこの事だろう。

男はピクリとも動かず、本当に寝ているようだった。ライダースーツのような服装で、装飾が派手で目立つ。寝息に合わせて揺れる常磐色の髪は少し長く、角度によつて紫に光った。

一方で白兔は奏のベッドで寝転び、嬉々としている。白兔はこいつを知っているから驚いてないのだろうか。なら白兔にこいつは誰だと聞くのが一番てつとり早いだろうと、寝転ぶ男に注意しながら尋ねる。

「あ、は、白兔？」

名前を呼ぶと、白兔がはすぐに振り向き、じ、とこちらを見てくる。実際には無いがウサギの耳がピンと立ったように見えた。

「何か用ですか？」

何処か嬉しそうな顔につられそうになりながら男のことを尋ねた。

「あの、この人…」

誰だ、と聞こうと思つたが、青祿のことが思い浮かぶ。また下手な物言いをしたら何か仕掛けてくるのではと緊張と不安が滲み出てくる。

言い淀んだ奏を不思議に思い、首を傾げる。しかしすぐに理解したように、ああ、と声を上げた。

「大丈夫ですよ。主には手を出せません。例え手出ししようとも私が止めます。主は私が守ります！」

きりつとして白兔は何処から出したかあの時の鎌を取り出す。それをしまうように慌てていうと、怒られたと思つたのか少女はしゅんとしてしまった。それに気づいた奏が頭を撫でるとまた元気になったが。

「ところで、こいつは誰？白兔の仲間？」

少女の言い方からすると仲間のよう聞こえたが、そうでなければ逆に怖い。その不安を汲み取ったのか、少女はベッドから降り、男の側に歩み寄りながら話し始めた。

「こいつは竜の氏（たつのし）です。神に仕える支の中では一番温厚なので安心してください」

そう言つて少女は、男の頭を蹴った。

「!？」

「起きてー」

起きて、などそんな軽い話ではない。男の頭をかけた瞬間に聞こえた、バゴ、という音は、確実に折れた音だろう。奏は心の中で、おやすみなさいと唱えるように言った。

「あれ、起きない……」

「白兔、そのやり方だと起きるところかむしろ永眠……」

止めようと奏が話しかけると、首が折れてそうな男がのそりと起き上がった。ポリポリと頭を搔きながら首をゴキンと音を立てて動かした。どうやら関節が外れたただけで折れてはなかったようだ。奏は胸をなでおろした。

「起きた起きた。 たっちゃん、新しい主だ。字は自分で名乗るべきだろう。早く言え」

白兔の言葉に従う様に、男は座り直し、叩頭した。

「主にお会いでき大変嬉しく、名誉な限りでございませす」

その声は地を這うように低く、温厚というよりはぶつきらぼうにも聞こえた。その行為を前に呆気にとられる奏を少女が諭した。

「……主、仕えの支は主からの言葉がないと頭を上げることができません」

「あ、顔、上げて」

たじたじの言い方に奏が一人心苦しく思っていると、男が顔を上げる。

「……お言葉有難く存じます」

男の顔が見えた。やはり青緑や白兔と同じく端正な顔立ちをしており、薄い眉と髪色

と同じように常磐で動かたたびに紫に見える瞳が印象的だ。薄めの唇と左の鼻翼にシルバーのピアスがしてある。

やはり温厚とは真逆の印象を覚える。そんなことを考えていると、男と目が合った。

「え」

男が驚いたような顔をしたと思ったら、白兔の方を振り向き、呆れたような怒ったような顔をしていた。しかし少女は動じず、ただ静かに視線を返した。

「……卯の子、お前一体……」

「ど、どうしたの」

男は奏を見るや否や舌打ちをして、キョロキョロと辺りを見回した。そして、ドアを見つければ開けると、まるで家を知っているかのようにドタドタと階段を降りていった。

部屋に残った二人の間に沈黙が下りる。

「……な、なんなのあいつ。白兔、やっぱり蹴ったのは……」

奏が困ったように尋ねると、白兔は困ったように笑った。

「……大丈夫ですよ主。あいつちよつと疲れてるんです」

本当だろうか、一抹の不安を書き消したのは、いつの間にか部屋に戻ってきていた男の声だった。

「……卯の子、母親どこいった？」

「え？」

横の白兎を見ると、俯くように、拳を握りしめていた。

「……白兎？」

## &lt;第二幕&gt; 第三節

明らかに様子のおかしい白兔に嫌な予感を感じ取り、男を退かして階段を駆け下りた。絡まりそうになる足をなんとか前に前にと出し、一階を目指す。いつもより段数が多く感じ、焦りがさらに強くなる。

下へ行くにつれ、鼻につく嫌な湿気がある。気のせいではないと気付いたのは、鉄臭い生暖かな空気がだんだんと強くなるせいだろう。

最後の段を飛ぶように降り、右手すぐのリビングの扉を、熱い金属のドアノブを掴み、開ける。一瞬ホワイトアウトして、強く異臭のする風が髪を後ろに弾いた。その光景が目飛び込んでくる。

「……っ！」

赤い。ひたすら赤い。その中に横たわる女性の胸に穴が空いている。

目を閉じ眠っているかのような穏やかな顔をしているそれに、薄らと涙の跡があった。

「……かあさん？」

それは奏の母親だった。何歳になっても変わらなかつた綺麗な顔は、死んでも尚その



形状を保っていた。その顔を見て、やっと母親の死が確認でき、それと同時に悲しみとも、怒りとも取れない感情が湧き出す。

「かあさんっ！」

走馬灯とはこれのことだろう。

母親との過ごした日々が次から次へ流れ出す。そうだ、ここの生活は辛いだけじゃなかった。父親が出ていく前はあんなにも幸せだったじゃないか。両親の愛情を一身に受け、楽しいことをすれば喜ばせ、悪戯をした日には叱咤を貰った。奏は決して不幸ではなかったと後悔のようなものが後からじわじわと感じられる。最近では疲れきっていた母親の顔は、笑うことが出来ていたのだ。

ぼろぼろと思い出の破片が一瞬にして頭を埋める。

「ごめんなさい……」

こんなときに詫げるのはおかしい気がするが、口をつけて出たのはそれしかなかった。きしりと音を立てる身体を、自らも血塗れになりながらしっかりと抱きしめる。

「……」

しかし依然として涙は流れなかった。

困惑しながらもそれをかき消すように母親を必死に抱きしめる。それでも涙は膜すら作らず、そのうえ、抱きしめているのは『母親』ではなくただの肉塊のように感じて

くる。冷たくて、固く大きな死体。そう一度自覚すると吐き気と嫌悪感が増して生まれる。

抱きしめる腕が疲れて、もうこれ以上この肉人形を抱き留めておくのは不可能だと思いい、それをゆつくりと寝かせる。血に染まったパジャマを軽く摘み、もう捨ててしまおうとやけに冷静に考えることができた。ぼんやりと母親を見ると、やはり変わらずに心臓の部分だけ穴が空いている。よく見ればそこから血管や千切れた肉の残骸が飛びだしているのが分かった。

ふとそこにあつたはずの心臓の行方が気になった。

部屋を見回してみるものの、それらしいものは見つからず、より行方が気になった。ふらりと立ち上がりリビング中を見渡す。すると、赤黒い塊が少し背の高いローテーブルの上にはぼつんと置いてあつた。

近寄つて見ると、やはりその物体は母親のそれだつた。

「……固まつてるし」

それを手に取り白兔がいる二階へ戻る。

白兔のあの表情からは、あの小さな少女がやったような気がする。しかし、きちんと本人から聞かなければ納得がいかない。真相は白兔が知っているのだろう。

もし白兔が母親殺しなら、少女からは距離を置くべきだ。せつかく信頼のできる相手

が人殺しなんて、奏は一人唇を噛んだ。

## &lt;第二幕&gt; 第四節

階段を登りきり自室に入ると、白兔と男が正座していた。

「ん？」

幻覚か、と思いそのまま後ずさり、部屋に入り直す。自室に入ると、白兔と男が正座していた。

いや幻覚ではないと、二人の前に同じく正座をする。その横に心臓を置き、無言の間が流る。

「……」

「…… 卯の子」

「白兔？」

男の真つ直ぐな表情とは違い、白兔は困ったような悲しそうな顔をしていた。その原因は恐らくと、奏は母親の心臓にちらりと視線を移す。

「……」

このままでは白兔はだんまりを続けるだろうと思ひ、奏は単刀直入に切り出した。

「白兔、これ」

奏は少女に心臓を差し出し、口調強く言葉を続ける。

「あなたがやったの？言っておくけど、あれは私の母親だったの」

少女はただ頷き、小さな声で答える。

「知ってました..」

ました、ということやはり白兔が殺したのだろうか。奏がどう切り出せばいいのか悩んでいると、男がいきなり頭をさげた。

「申し訳ありません！」

土下座の格好になった男を奏と白兔は驚き見つめ、訳の分からない空気が流れる。白兔に助けをアイコンタクトで求めるが、白兔も動揺して、正座のまま二人の間で目線がいつたりきたりしている。

「.. 私たちが、手を掛けたも同然です」

「.. え？」

男の低く凜とした声が、あつさりと告白をした。

「て、手を掛けたも、同然って.. じゃあ、やってはいないってことで..」

更にわからない。起きて間もない脳をフル回転させ奏は考える。奏が無言でいることを気にしたのか、白兔が話しかけたそうにソワソワとする。それに気づいた男が白兔に耳打ちをし、そうかとおもうと、白兔は姿勢を直しキリツとする。

「主―」

「んえ?」

いきなり呼ばれ間拔けな声を出したのも気にせず、少女は変わらない口調で続ける。「主の母上を弑したのは白兔でも、たつちや。竜の氏でもありません。ただ。えつと。」

「?… ただ?」

急に口を噤んだ白兔を疑問に思いつつ、言葉の先が気になり期待の眼差しで見えてしまう。そうした後でそれが言い出しにくいものだったのでは、と気づき、はつと口を押さえた。

「ごめんなさい! 言い難いなら言わなくてもいいから」

口を噤み目を逸らしていた少女は、それでも向き合い、口を開いた。

「いえ、大丈夫です。口にするのも嫌なくらいですが。」

ならば言わなければいいのにと奏は思ったが、せっかく白兔が話してくれるのだからと、白兔につられ姿勢を正す。

「母上を弑したのは、私たちと同じ、支です。神に仕える支の一人だと、はつきりと言えます」

「支?」

「はい」

ということとは、青祿だろうか。事実、支と名乗るものは残虐極まりないあの青年と、前の二人以外思いつかない。それとも他にいるのだろうか、彼等のように綺麗な顔の『神に仕える支』とやらが。

奏がまた思考の波に流され考え込んでいると、白兔が手を握ってきた。

「ん?」

奏はそれに笑いかけたつもりだが、白兔は怯えたようにびくりと肩を浮かせ、今にも泣き出しそうな声で話しかけてきた。

「あ、あるじい…」

「え、え!」

奏は驚いて男を見たが、男も同じような表情をしていたため更に驚き何も出来ない。すると白兔が飛びついてきた。

「やはり、やはりお嫌いになられましたか…?」

「え、き、きらい?なんで!」

「だって、主の母上は私たちの同族が殺してしまっただけですよ?怖いとか、やっぱり残虐な奴らとか、思っついていらっしやっつてっ…」

ついにぐずぐずと泣き始めた白兔を訳もわからないまま撫でる。

「あの、白兔、落ち着いて…」

「落ち着いてるんですけど、主に嫌われると思ったら、悲じぐでっ、なみだ、どまんなっ…」

「あー…」

泣くのはいいが、流石に血塗れのパジャマに倒れこまれては白兔が汚れてしまう。奏は白兔を座らせ、ティツシユを引つ張り出し顔を拭く。しかし、拭いても拭いても涙は止まらず、白兔も鼻をすするばかりだ。仕方なくティツシユを置き、代わりに少女の両手を強く握った。

「…主？」

「白兔、よく聞きなさい。私は白兔のことも、もちろん竜の氏のこと嫌いにはならない。いいいい？」

「…」

「…」

奏の視線を受け二人はただ黙る。

「第一ね、二人がやって無いことにそんなに反省しなくていいの。私そんな理不尽なことでは怒らないし」

白兔と男は俯きしゆんとする。奏は今すぐ抱きしめたい衝動を抑え話し始める。



「それにね、私、こうして二人が正直に話してくれたり反応してくれたりするのが嬉しいのよ。だから……白兔。もう嘘はついちゃ駄目。いい？」

「……主」

「……」

二人の間に割つて入るように奏が白兔と男に包容する。それに応えて二人の手が、遠慮がちだが、それでもしつかりと背中に腕を回していた。

「大丈夫よ。何も不安に思わないで」

奏が背中を二回叩き離れる。が、白兔はそれに引つ付くように、また赤黒いパジャマに顔を埋めて泣いていた。

「……白兔の泣き虫」

「ごめつ、なき……」

謝りながらも泣き続ける白兔の頭をゆつくりと撫でた。

穏やかな沈黙が降りていた。それを砕いたのは、ピンポンという、明るいチャイムの音だった。

## &lt;第二幕&gt; 第五節

「誰か来たのかな」

そこで、時計を探していたことを思い出した。デジャブな気はするが、白兔を起こし、また涙をティッシュで拭きながらカバンのことを言う。

「白兔、私のカバン知らない？ 図書室に置いてあったで… あ」

もしかしたら燃えてしまったという事もある。それなら白兔が持つて帰つてこなかったことに納得がいく。

「… か、ばん？」

泣いた後すぐに嗚咽が止まらない白兔の頭を軽く叩き、パソコンの電源を入れ、時間を確認する。

起動を待つている間に、ふと先程のチャイムを思い出し、取り敢えず先に来客者を確認しようと立ち上がる。

「… 白兔、竜の氏。私ちよつと玄関見てくるから待つてて」

白兔はこくりと素直に頷いた。奏はその姿につられ笑顔になった。

「すぐ戻るから」

ドアを出ようとすると、足の裾が掴まれつんのめりそうになった。その奏の服を掴んだのは白兎の手ではなく、男の、竜の氏の手だった。

「どうしたの？」

「だ、駄目です」

見るからに鬼気迫るような顔をして、奏を見ている。

「…？」

「行つてはなりません！主、出来ればここにいてください…！」

その様子をおかしいと思つたのは奏だけでなく、白兎はすぐ立ち上がり、窓を開けたと思つたら、そのまま外へ飛び出していった。

「白兎!？」

声をかけたが既に遅く、白兎の綺麗な白髪 of 毛先がちらりと見えたただけだ。

「主、断じて声を出してはいけません」

「は？何言つてんの？」

すると、またチャイムが聞こえる。

そういうえば、パソコンを立ち上げておいたはずだ。奏はディスプレイを覗き込んだ。

「…え」

ディスプレイの時計なら、壊れることはまず無いだろう。だから誤つた時刻を表示す

ることは、設定などを弄らない限りない。そうならばこれは正しい時間だ。

2時9分。

そう表示された画面に驚きを隠せないまま、しかし竜の氏がなぜあのようなことを言ったのか察した。

「……わかった。ここにいます」

その答えにほっとしたのか、竜の氏は手を離した。

「取り敢えず主は大きな物音を立ててはいけません。せめて、卵の子が戻ってくるまでそうしてください。お願い申し上げます」

「またも叩頭する竜の氏を奏は齒痒く思う。」

「ねえ」

「はい」

「……」

竜の氏は叩頭したまま返事をし、いつまでも何も言わない奏を不思議に思ったのか、やつと顔を上げた。

「主？」

「あのね、それ、止めて」

「それ？」

竜の氏は自分の周辺をキョロキョロと見回し始めた。

「それ、とは?… なにかご不快な点があるのですしたら今すぐに改善致しますので、どうぞ遠慮なさらずに叱咤を…」

「それ」

「は」

竜の氏は、文字通り目を丸くして奏を見た。奏はその阿呆面に吹き出しそうになるのを堪えて、言葉を切り出した。

「その、やたらめつたらに丁寧な口調。なんかそういうの慣れてないってどうか、ちよつと照れ臭いってどうか、喉の奥がムズムズするのよ」

その発言に竜の氏は怒られていると思ったのか、また叩頭する。それに奏は溜息をついた。

「… それも。私はどつかの石油王じゃないのよ」

「…」

奏の溜息に合わせて竜の氏の顔が上がる。その表面には、畏怖とも困惑とも取れない表情があった。

「私はあなた達に頭を下げられるようなことをしてないし… それに、今日… もう昨日なのね。会って1日しか経っていないのに、そんな態度をとられたら、なんていう

か…… 気持ち悪いって言うか……」

竜の氏は依然として表情を崩さない。しかし、それも白兔が戻ってくるまでだが。

「主」

「白兔！どこに……」

ピンポンと、またしてもチャイムが鳴る。奏の言葉を遮るだけでなく、今度は何度も何度もなり続けた。

「…… なんなの……」

「…… 来たのか？」

「恐らく」

暫く黙り込む二人の間に、アイコンタクトがあつた。同時に頷くと、二人の支は緊張で火照る頬のまま奏を振り返った。

「…… 主、少しお時間を頂いても宜しいですか？」

「いいけど……」

白兔の珍しく真面目な顔に気圧されながら奏は言葉を返した。

「私たちは、主の世界とは正反対にある第二支国という場所からやって来ました。今訪ねてきている者は恐らく他の支国から来たものです。主の絶命を望む者達です。なので……から一刻も早く、逃げなければなりません」

シコク。またわからない単語が出てきたと、奏は軽く頭を痛めながら頷く。

「… つまり、ここからでないと危ないのね」

「左様でございます。ですが、この場所から日本のどこかへ逃げても結界がない限り、奴らは追ってくるでしょう。ですので、私たちの国へ帰りましょう。さすれば主の御身も危険ではございません」

「… わかった」

奏は生真面目に返事をした。正直なところ、この言葉は嘘になるが。

白兔の言葉の半分は理解出来なかった。しかし、白兔がこんな表情をして、しかも尋常じゃない冷や汗を見れば、只事ではないことがひと目でわかる。実際に奏自身の手も得体の知れない恐怖に震えていた。未だチャイムは鳴り止まない。

奏の返事を聞くや否や、白兔と竜の氏が立ち上がった。

「御理解頂きありがとうございます、さっそく帰りましょう。竜の氏」

「は」

竜の氏は顔を上げるだけの会釈をし、ライダースーツの中から硯のような、金箔で文字の飾られた四面体の塊を取り出した。

奏が呆然と立っていると、チャイムの音が鳴り止み、久しぶりの静寂が訪れる。

「… いなく、なった」

奏がほ、と息をついて白兔に笑いかけたが、白兔は窓の外を見つめ、一人、眉間に皺を寄せた。

「：： いえ、まだです」

その白髪が風のない部屋で揺れた。鈍い金属音がなり、奏のあの鎌が出てくる。

「：： え？」

鎌から反射した月明かりが部屋を明るく照らした。



## ＜第二幕＞ 第六節

白兔の顔が影る。いや、そのとき窓からさす月明かりが遮断された。

みると、窓に獣の顔が覗いていた。黒に赤い模様の入った毛皮を靡かせ、赤く光る目は敵意どころか殺意を感じさせる。

「いやっ?!」

悲鳴を小さくあげ、尻餅をつきそうになった奏を肩を、竜の氏が支える。

「…主、静かに」

小声で話す竜の氏に、声が恐怖で出ないため首を振って返事をする。

「…緋目」

白兔が一つ言葉を落とした。

「…?」

ヒモク。意味が分からずに竜の氏を見ると、男は唇に人差し指を当て、『喋らないで』の仕草をする。白兔は二人をちらりと見て、またぼそぼそと呟き始める。

「…リンレイ、緋目を2里先まで誘導せ」

また分からない言葉が次々と出てくる。奏の頭は痛くなるばかりだ。

「… 行け」

白兔の低い声が静かに響いた。それを合図に高く澄んだ、鳥の叫びが遠くで聞こえてきた。りー、と耳に心地よい鈴のような声だ。すると、獣はその音につられるように北を向く。もう一度声がすると、顔の方向に去っていくのがわかった。

窓の端に獣の蠅のような尾が見切れ、ザワザワとした空気が穏やかになる。

「… もう、大丈夫です」

ぺたりと座り込む奏に、白兔が手を差し出し、笑いかける。月光が、少女を祝福するように全身を包んでいた。

「あ、あれは、何？」

声の震えが止まらなく内心情けなく思いながらも、白兔の手を掴み、すくと立ち上がる。その様子に白兔は安心したのか、笑顔すら消え疲れた顔になった。

「あれは緋目といって、攻獣の跡類です。あの大きさなら恐らく、長使だと思われます」  
「ん、と…」

ヒモク、コウジユウ、セキルイ、チヨウシ。

奏の頭痛は痛みを通り越して耳鳴りとなった。分からないことが多すぎる。今までのことといい、奏は何も分からなかった。ただ、あんなモノが自分を追ってきているのだと考えると、不安が大きくなり、肩が重く感じる。

「あ、すいません！主には少し難しいですよね……。えつと……。何からお知りになりたいですか？」

奏は頭痛で悩まされる一方、例も違わずいつも通りの白兔に思わず笑みが零れる。それも失笑となってしまうのは、この煩わしい頭痛のせいだろう。

「……不甲斐ない主で、ごめんなさい」

情けない。その心持から弱々しい言葉が自然に出てくる。

「あ、主、そんな、御自身を責めないでください！」

慰めが余計と重しになる。しかし、湿った空気はすぐに吹き飛ばされた。

「卯の子、発つならば早い方がいい。もし緋目が仲間を呼んでいたら厄介だぞ」

竜の氏の乾ききった声は奏の不安を焦燥でかき消した。今はそれにありがたく思える。

「そうだな。主、行きましょう。帰りましょう」

「……」

うん、と言いかけ、つと考えた。

——本当に私が主で良いのだろうか？

その瞬間にぞろりと背中を這うものがあつた。形容のし難い、漠然とした大きなもの。

憂虞。

今ですら彼らを危険な目に合わせた。確かに少女は『奏を狙っている』と言っていないか。ならば、彼らは私と合わない方がいい。それに、彼らには帰るべき場所がある。奏がついて行ってしまうことは、それを奪い、消滅させることではないだろうか。この夢のような現実から離れるべきではないのだろうか……。

——これは、きつと、悪い夢だ。

藍濁に引きずり込まれていく思考は悪い方向へとひた走る。耳鳴りが小さくなる。それに伴い意識が、視界が、狭くなっていく。

「……私は……」

消えるべきだ。ぼつと零れた。

すると、奏の蒼白い顔に、指先の冷えきった手が触れた。

「つーつめたつ、白兔？」

視線を向かわせた先には、白兔の無表情。硝子玉のような目がしつかりと奏の不安を見抜いていた。瞬間に頭が真っ白になる。不安や戸惑い、拒絶、恐怖。いくつもの思考が一つに束ねられた。白兔が、そうさせた。

「……」

「主、何を、迷っているのです」

いつもの笑顔はそこに無く、ただ、静かに、淡白な言葉を紡ぐ。少女も疑心暗鬼になっているように。

「もしや、何かこちらの世界に凝りがありますか？」

「そうじゃ、ないけど…。」

「けど？」

少女はただ純粹に奏を見つめる。それだけのこと。なのに、殺気でも放たれているかのような気持ちになり、その言葉に、冷たい手に、白兔に気圧される。いや、白兔ではない。気圧されているのは、自分自身の、罪悪感だ。

「… 私は、きつと迷惑をかける。私がさつきみたいな猛獣に追われているのが事実なら、確実でしょ？それに竜の氏にだって怖い思いをさせてしまったんでしょ？だから…。」

藍濁が、捕まえる。

「だから、私は、一緒に行く資格なんてな…。」

「主！」

奏の言葉を遮り、少女の覇気のコもった声が響いた。瞬間に視界が明るくなる。鮮やかに塗り替えられ、思わず目を見開いた。

「何を迷っておられる？何に恐怖を感じておられる？主は、私たちが頼りないとも言

うか。それとも信頼できないというか」

呆氣に取られる奏をよそに、少女は強い口調で続ける。

「資格なんてものは最初から無い！そんなものが支国にあれば、もしそれが弱みの一つでも許さぬとすれば、誰一人として入ることは許されぬ。……主、白兔の目を、よく見てください」

硝子玉が、キラリと円を描いて光った。

「！」

「……主が不安なことが、どうして私には、涙を晒すほど不安ではないか。何も深く考えず、私たちを信頼してはくれぬか。力になれずとも信頼してはくれないか」

奏から、一粒の滴が落ちる。

「……迷惑など、お互い様、世話になることなんて当たり前だ。それでも尚、主が怖くたまらない時は私たちを盾にしても良い。元来その為に生まれてきた。それでも不安が消えないならば、主には敢えて資格があると言えることがある」

「……何？」

「……主が、私たちの主であらせられることに、何の不足が御座いましょうか」

少女が笑いかける。奏は離れていく手が勿体なく、切なく感じた。

「……また一時問う」

少女の頬に、硝子玉が流れる。

「主、帰りましょう。一緒に、私たちと行きましょう」

ざわりと肌が粟立つ。頭から爪まで満たされる幸福。何度も感じてきたであろう、この気持ち。

無償の愛は、まさにこれだ。

何も持たない一人が他に必要にされる。それがどんなに嬉しいことか、なぜ忘れていたのだろうか。こんなにも幸せなことを。

フローリングに一つ、水滴が弾けた。

「… 帰ろう、白兔。一緒に帰ろう」

「主…」

もう迷いなど、必要は無い。開けた心に、じわりと温かさが広がった。

## &lt;第二幕&gt; 第七節

竜の氏は一つ、大きな溜息を吐いた。

「……卯の子」

その凜とした声に二人は振り返り、ぽかんとする。竜の氏はまた、大きな溜息を吐いた。

「……そろそろいいだろうか。和解もできたようでは何よりだが、本当にここは危険みただい」

白兔は何かを悟ったかのように、急に顔つきが険しくなる。

「……シンハイか？」

「ああ。どうやら仲間は本当に来ているらしい。それも……恐らく長使だ」

空気が張り詰める。白兔の目付きが、怒りに染まる。白兔の背中しか見えない奏でさえも、その殺気を感じる事が出来た。

「……シンハイが？真か？」

竜の氏は表情をひとつ変えず、目を閉じた。常磐の臉が動き開く。

「……答えは変わらないようだ。それに、一族は嘘を言えない呪詛に縛られているから



な」

「そうだったな……」

謎の単語を交じわす二人に呆氣に取られながらも、奏は何かまずいことが起きている事を静かに察していた。

「……白兔」

「あ、申し訳ありません。少し待っていてください」

柔らかく笑う少女に、笑顔を返せない。白兔はそれを見て取ったのか否か、竜の氏に真剣な眼差しを向ける。

「……竜の氏、行くぞ」

「……」

竜の氏はあの四角の硯を取り出した。

「……（こ）じや、狭いぞ」

「そうか……」

白兔は視界にぼんやりと映る窓に目をやり、口の橋を上げた。その表情は、悪戯を思いついた小さな子供のようにだ。

「……主」

「ん？」

少女は笑つてみせる。

「外に行きましよう!」

「え、なんで……つて、うわっ?!」

驚くのも束の間。奏の体はふわりと浮いていた。竜の氏が抱き抱えていたのだ。急な場の回り方に混乱し、手足をじたばたと動かし藻掻く。しかし、男の腕は、見た目と相応しない力でそれを受け止める。

「な、なに、おろしてっ!」

「え、ですが……」

驚嘆する奏と比べ、あくまで落ち着いた声でやんわりと抵抗を見せる。白兔はその様子を困った様に見ていたが、困り顔のままであるものの、竜の氏にしっかりと頷いた。

「……主、暴れないでください」

「なら、放しなさいよ!」

反抗的な態度を気にもとめず、男はゆらりと歩き始める。

「少しの辛抱ですから」

窓の前まで来て立ち止まり、男は窓枠をじらりと見つめた。

「なにが……」

窓枠に足をかけると、そのまま前へ、窓をくぐり抜けるように身を屈め、そして一歩

踏み出した。

ひゅつと喉がなり、思わず息を飲んだ。

「つ……！」

危険を感じ、痛みに備えて咄嗟に目を瞑る。体が強張り自身が小さくなつたような気がした。

しかし、衝撃はいつまでも来ない。衝撃どころか、感じるのは全身を撫でる風と、それに靡かれ、頬を擦る頭髮の感触。

不思議に思い目を開けると、そこには、海があつた。

ネオンの海。チラチラと輝き続けるビルが、家々が、奏の遥か足元で横たわっている。小さなジオラマが、蠢いている。その遥か上には燦然と輝く半月が構えていた。

思わず竜の氏を見ると、男はある一点を見つめ奏のことなど忘れていたようだった。

飛行の終に着いた先は神社、それも相当古い社の玄関口。すっかり苔蒸した狛犬に挟まれ、後ろを階段が埋めていた。その先は暗く、肉眼では何処まで続いているかはわからない。

「主」

竜の氏が静かに声を掛ける。と、奏を丁寧に下ろし、膝を折り頭を垂れる。それも一

瞬、立ち上がり上を見上げた。

「……」

その一連の動作に呆気に取りられながらも、男の向いている方向に、奏も顔を上げる。これはどうやら、ただの会釈のつもりなのだろう。

「……うわっ」

満天の、煌めく一面の星。その中に胸を貼る上弦の月が存在も大きく鎮座していた。都会では見れないこの空の裏の顔を、瞳一杯にしみこませて、光を反射する。

「すっ……こんなところあったんだ……」

「え」

奏の感嘆の声に、竜の氏は小さく声を上げた。

「これが常では無いのですか？ 私は生まれてこの方、この様な夜空以外など目に留めたことはないのですが」

それぞれに驚いた二人の目が合う。

「それは…… そうなの？」

「あ…… いえ、これよりも眩しい、と言ったところでしょうか」

「へえ……」

視線を外し、再び上を見る。竜の氏もそれにつられて同じところを見る。

竜の氏も、見た目に反し、なかなかロマンチックなところがある、など呑気なことを奏は考える。

奏は自身の蒼白い腕をめいっばい、月へと伸ばした。月は、数万、数億キロ、それ以上も離れた場所にある。それがこの手に届き掴み取れそうな程明るい。

「……綺麗」

ぼんやりと眺めていると、明るい月にシルエットが浮かんだ。それは最初は小さく、しかし段々と近付いてくる。そう、こちらに向かつて急降下してきているのだ。

「え」

あまりの出来事にそれを凝視するだけに終わり、身動きが取れない。その横ではただ竜の氏が月を——シルエットを見つめる。

「……来た」

竜の氏の声は驚きも焦りもなく、冷静の一言に限った。

シルエットが、ついに落ちた。

その落下地点から大きな突風が押し寄せてくる。

「っー」

本能的に目を閉じ、手を前に顔を庇う。

「……な、に……」

目を開けると、そこにはシルエット——白兔が中を浮いて、こちらを心配そうに伺っていた。

「…主？」

「はっ…！」

白兔、と言いかけて歩み寄ろうとした足を止める。

「主…？」

そこに立っていたのは、白兔だ。しかし、白兔ではない。

あの流れるような絹糸の白髪は、漆黒にも捉えられる深紅に染まり、瞳はレーザーでも発しているのか、暗闇の中でも赤く光っていた。

「…白兔じゃない…？」

その言葉にはっとしたのか、白兔の浮かぶ瞳の赤が丸くなる。さっと後ろを向き、その姿がゆっくり地面に足をつけた。

紺のスカートがふわりと回転する。その動きに合わせて白兔がこちらを向いた。

「…私です。白兔ですよ、主」

## ＜第二幕＞ 八節

月光を背に立つ少女は、白兔。それ以外の何者でもなかった。

「…白兔…なのよね？」

少女は愛おしく笑う。

「私は、私です」

「…だよね。…っ!？」

また、頭痛の波がやってくる。頭に鈍く連なる波。思わず膝を折る。

「主っ!？」

「どうされました!？」

白兔の心配した声に竜の氏も振り返る。

二人の声が遠くなり、そして、ひとつのビジョンが頭の中を占めた。

—輝く満月に、その光に負けじと燃え続ける星々。自身の立っている周りには、山中を思わせる木々と、古い建物が一つ。月光だけが照らす、ひっそりとした、薄暗い場所。

そして、笑って空を見上げる自分と、二つの影——白兔と竜の氏——

呼吸が一瞬止まる。頭痛が収まり、視界がクリアに感じた。同時に、二人の支の心配

そんな顔が目にとまる。

「…主？」

「…」

いつのまに座り込んでいたのか、白兎の手を借りてふらりと立ち上がる。冷えた頬に脂汗が伝った。

「いかがなされました、顔色が悪くていらつしやる」

竜の氏の声が飛んでくるも、奏は反応ができなかった。

「…」

ひたすら思うことは、ひとつ——さっきのことを、あの光景を、話すべきだろうか。

「…いや、大丈夫。少し頭痛がしただけだから」

頭を振り、考えたことを振り払う。きつと言わなくても、ただの幻覚のようなものだ。少し気持ちが高揚していたから、変なものが浮かんでしまったただだけだ。

「…問題ないよ」

言い聞かせるように口を動かす。しかし、二人の不安そうな表情は変わらなかった。

「本当ですか？お辛くありませんか？」

奏の手を白兎が強く握った。奏はその上にもう片方の手を乗せ、そして笑ってみせる。



「…大丈夫、だから、手を離して。ね？」

優しい口調に、しゅしゅと手を離していく。手の温度が急激に下がった気がした。

「…白兔」

「はい」

白兔の心配そうだった顔が、返事とともに真剣な顔つきになる。

「竜の氏」

「…はい」

一方で竜の氏はまだ不安げな表情を崩さない。

奏は、拳を握り、その手を開き、息を大きくはいた。まだ胸に残る、一抹の不安を吐き出すかのように、ゆっくりと。そして、夜の山の冷たい空気を胸いっぱい吸い込んで、笑った。

「…行こう、第二支国へ。私たちの居場所に、帰ろう」

その言葉を合図に、二人の顔に光が射したように見えた。

次に来たのは、倒れてしまうほどの強い衝撃。

「うわっ！は、白兔！」

「…帰りましょう、帰りましょう、主！」

「…うん」

奏の胸に顔をうずめる白兔の頭を優しくなでる。正直、腹部が痛み、どいて欲しかったが、このくらいは我慢できた。

そして、その白兔を持ち上げたのは、竜の氏の腕だった。

「は、放せたつちゃん！」

「…卵の子、そろそろどくんだ。主が困ってられる」

竜の氏は白兔を子供を扱うかのように、軽々と持ち上げおろしてやると、奏に手を差し伸べた。

「申し訳ありません。主、立てますか？」

「ありがとうございます」

竜の氏の手を借りて立ち上がり、砂や葉っぱを払い落す。

「…では早速ですが、ここを発ちましょう」

白兔の言葉に頷くと、竜の氏があの硯のようなものを取り出した。

「…主、少し下がっててください」

「え？うん…」

竜の氏は二人が離れたことを確認すると、大きく息を吸い込み、呪文のようなものを唱え始めた。

「我は神に仕える者、字は無。今、真の姿をここに宿したまえ。我が名を、竜の氏…輪廻」

すると、竜の氏が持っていた硯が鈍く光りはじめた。その光もだんだんと強くなりはじめ、そして光は竜の氏を覆っていく。

光は大きくゆがみ、変形してゆく。次第に大きくなり、そして光は消えた。そこにいたのは、大人三人分もあるだろう、大きな白竜だった。

「…竜の氏…なの？」

竜は常盤色の瞳を細め、答える。

「はい。これが本当の姿でございます」

月光を返す鱗に、長い髭と立派な二本角、絹のような鬣がちらちらと輝いて見えた。六本の鉤爪をもつ美しい竜は、よく見れば中に浮いている。

「…恐ろしい、でしょうか」

何も言わない奏に、不安を感じたのだろう。竜の瞼がゆっくりと閉じた。

「…いいえ、とつても…」

言葉が途切れる。

とても綺麗。綺麗すぎて、怖いのだ。

「…さわってもいい？」

「どうぞ、お好きになさってください」

竜の足が地に着いた。奏が触りやすいようにするためだろう。奏の青白く、細い指が

竜の氏の上にそっとおかれた。

額から鬣をなぞるように手を滑らせていく。薄く竜の瞳と同じ色をした鬣は、予想より遙に柔らかく、鱗も同様で、一枚一枚が陶器のようなさわり心地がした。竜は、心地よさ気目目を細める。

「…案外、柔らかいね。鱗とか、もっとガラスみたいに堅いかと思った」

「硝子…ですか？」

「主、竜の鱗は全て皮膚と同じですよ。ですが、歳を重ねれば固くなっていくと聞きます。竜の氏はまだ若人ですから、このように柔く、鎧の役割はないですが」

「そうなんだ…」

白兔の明るい表情が崩れたのは、その束の間だった。視線の先には、さっきまで上を飛んできたネオン街。

「…白兔？」

遅れて竜の氏も同じ方向を向く。

「…奴らです」

竜の氏の緊張が伝わる低い声が耳を霞めた。

——奴ら？

その瞬間、ぐらりと地面が揺れた。そして、けたたましい号砲のような声が響く。

「!？」

思わずその場にしゃがみ込む奏を、影が覆った。顔を上げると、そこには巨大な、化け物がいた。

「…みいつけたあ」

化け物の口の端から涎がしたたり落ちた。

## 〈第二幕〉 九節

「主!!」

「……え?」

白兔が動くより先に、化け物の腕が振り下ろされた。

奏の体は恐怖で動かず、脳が再び働き始めた頃には、目の前まで迫っていた。

——だめだ。そう思い、目をつぶる。

衝撃音とともに砂埃が立った。

「……しんじやつたあ?」

化け物がにたりと、涎の垂れる口を歪ませる。

しかし、煙幕の晴れた先には、奏の死体はなく、全身を淡く光らせる白竜——竜の氏の姿があつた。

「……主、お怪我はごさいませんか」

化け物の腕を、見えない壁が妨げ、奏を守つたのだ。

「あれえ?」

笑っていた化け物が腕を押し込もうと、力を入れる。が、その壁は壊れるどころか、厚

みを増し、薄い層が目視できるほどにまで強化されていく。

「…た、竜の氏が？」

奏の問いに、竜は一回だけ瞼を落とした。そして、やはり穏やかな声で話す。

「主、私の背中に乗ってください」

「え？」

「お願いします」

「わ、わかった…」

奏が恐る恐る背を跨ぐと、触った時には感じられなかったほのかな熱が伝わってきた。

「しっかりとつかまっていますか、触った時には感じられなかったほのかな熱が伝わってきましたか、竜の氏は声を上げた。」

「卵の子!!」

「卵の子!!」

「どうやらそれが合図だった。」

化け物の腕が飛んでいった。その血しぶきから逃れるように、竜の体はその場を後に宙へ舞う。

化け物の悲鳴が轟き、大きな音を立てて倒れるのが足元に見えた。

「…あの、化け物…」

「…居場所が見つかってしまったのでしよう。しかし、それにしては…」

竜の氏のつぶやきを消し去ったのは、大地を揺らす巨大な音。鈍器で山を叩いているようなその音が伝わり、奏をびりびりとした空気が捕まえる。

「…すごい音」

奏の感心した声に、竜の氏はいつも通りに答える。

「卯の子ですから。久しぶりの戦闘に興奮しているんですよ」

「白兔…?」

足元には化け物がのた打ち回りながら血を流す姿、それも、何かから逃げ回りながら。「…あれが卯の子ですよ」

竜の視線の先には、紅色の少女が暴れていた。

化け物の手足をもぎ、視界を失くし、血に染まりながらも深い傷を負わせる、赤い少女。月光に赤く照り出され、艶めく残酷なその姿は、恐ろしく。

「…綺麗」

奏の目を奪った少女はすでに動きを止めており、その足元に転がるのはついさきほどまで惨めに這いずり回っていたあの化け物。

竜の氏が白兔のそばまで急下降した。地上は獣臭く、また鉄臭く、異臭が漂っていた。「卯の子、気は済んだのか」



声に反応した少女は大きな鎌を片手に肩で息をし、こちらを捉えると、笑った。あの柔かな笑みではなく、殺意を含んだ笑みで。

「…白兔？」

しかし、奏と目が合ったとたんはその笑みは消え、愕然とした表情に変わった。

「…あ、ある、じ…」

そのまま林の中へ飛び込み、どこかへいつてしまった。

「白兔!？」

「沢にでもいったのでしょうか。きつと、血を洗い流して戻ってきます」

「そう、かな…」

竜の氏の言った通り、白兔は血を洗い流しただけなのだろう、すぐ戻ってきた。しかし、裸で。

「は、は、はくと!？」

「え？」

「え、じゃなくて!!なんで服着てないの!？」

「…服は、濡れてますから」

確かに、脇には薄く赤色に染まったブラウスと紺色のスカートが水滴を垂らしていた。

「あー…」

「…着た方が、いいですか？」

「えつと…」

「ここには竜の氏もいる。しかしだからと言って服を着ると白兔が風邪をひく。

「…じゃあ、着ます」

「風邪ひかないでね…」

とりあえず「ここは白兔に我慢してもらおう。

「…では、主。行きましょう」

「…うん」

白兔に手を引かれ、竜の背中にまたがる。

「つかまっついていてください」

「あれ、白兔は乗らないの？」

竜には乗らず、横でスカートの裾を絞っている白兔に声をかける。

「私は大丈夫ですよ」

「でも」

竜の背中が揺れる。数センチだけ浮かんでいた。

「卵の子には翼類のリンレイがいますので、心配いたただかなくとも」

「リンレイ…」

白兔がさつき呼んでいた、あのことだろうか。

「はい。呼びましょうか」

「リンレイは翼類の攻獣ではとても美しく、希少な種だと言われております」

「へえ」

竜の氏のトーンのない話し方には感情がこもっていないせいか、それが本当の話かどうか、信じがたい。

「リンレイ」

りー、と高く澄んだ音がした。奏が声のした方向をみると、翼を広げた鳥が、こちらに向かってきているのが見えた。その姿は竜の氏より大きく、三メートルをゆうに超えていた。

「あれですよ」

「…鳥？」

リンレイは白兔の目の前に降り立ち、白兔に叩頭した。白兔はその頭を一撫ですると、鳥の背中に乗った。

「私の方も準備が出来ましたので、行きましょう」

体がぐんと沈み、それも一瞬で後は風が取りぬけるだけだった。宙に舞う竜の足元に

は模型のような街並みが広がっていた。

そして後ろには、美しい鳥の背中にまたがる白兔もいる。

奏が振り向いたことに気付いたのか、白兔が声をかけてきた。

「主、国に着いたらやるこゝろがたくさんありますよ」

「やるこゝろ？」

奏は揺れる背中にしがみついた。

「まあ、その話についてからにいたしまし……」

白兔の言葉が途切れる。すると、後ろからあの号砲が聞こえてきた。

「な、何?」

奏の悲鳴のような声が響く。

「緋目です! やつぱり生きていたか! 竜の氏!! 急げ!!」

白兔の声に反応し、竜の氏はスピードを上げる。

「主、近くに鏡……いえ、湖や、海はありませんか」

竜の氏の低い声が焦って聞こえる。

「湖……はないけど、海なら、あつちに」

奏は東を指差した。竜の氏が方向を変え、海を目指しているようだった。

「ねえ、海を目指してどうするの」

身を切るような冷たい風が髪をなびかせ、首元が寒く、身を震わせた。それに気づいたのか、竜の氏が答える。

「その話は後にしましょう。早く国へ帰り、温まつてから、お話します」

「…そうね」

またしても号砲が響く。そして、海が見えた。

「竜の氏！」

白兔の声が、あの化け物が迫っていることを伝える。一息置いて、竜の氏の低い声が短い返答を發した。

「…開」

目の前の海に、白く光る輪っかが現れた。その輪はだんだん大きく太くなり、ひとつの穴となった。

「行きますよー！」

竜は急降下し、その穴の中へと入った。

「っ!!」

入った瞬間、視界に閃光が入り込み、思わず目を閉じる。

冷たく鋭い風が、生暖かい、春の風に変わった。

「…?」

目を開けた瞬間に入ってきたのは、島弧。その形は奏もよく知っていた。

「…日本?」

それは日本国そのものの形をしていた。しかし、周りには海しかなく、ぼつかりと浮かんでいるのは、その島々だけ。そして、大きな違いはもう一つ。

「…逆?」

その日本国は東西を逆に、まさに日本を鏡に合わせたような形をしていた。

「主」

さっきの切羽詰まった声音とはまるで違う、白兔の穏やかな声が聞こえてくる。

「ここが、我らの神が守ってくださいている、世界です」

白兔が本土の中央を指した。

「そして、あれが第二支国」

その先には、街と山の入り交ざった、ひとつの国が見えた。

## 〈第三幕〉 一節

竜の降り立った場所は、大きな宮殿のような場所の入り口だった。

門番らしき男二人は、こちらに気が付いたのか、近寄ってくる。その眉間にはしわが寄っており、明らかにこちらを訝しんでいたが、竜を見たときとたんにその表情を変えた。

「卯の子様、竜の氏様！」

そして、二人の男は膝をつき、こうべを垂れた。

「うん、今帰った。門を開け、宮女を呼んでくれ」

「はい！」

短い返事の後、男たちは走り去り、しばらくして厳かな門が開いた。

門の内側には、叩頭する人々が道の両脇に並び、花道をつくっていた。

「さあ、行きましよう主」

「え、なにを？」

奏は花道を嫌そうに見た。

「気圧されてはいけません。ここは国主として堂々としていてください」

「わ、わかった」

門をくぐり、花道を進むと、一人の女がかけてきた。

「卯の子様、竜の氏様！おかえりなさいませ！」

女は奏たちの目の前で叩頭し、すぐに立ち上がった。

「我ら国民はあなた方のお帰りを心待ちにしておりました」

「歓迎ご苦労。着替えを用意してくれ。私と竜の氏、このお方の分も」

「かしこまりました」

女はすぐ建物の中へ走りだし、見えなくなってしまった。

「では、こちらです」

白兔は落ち着いた様子で建物内を歩いていく。

「白兔？」

「なんですか？」

後ろを振り返った白兔は足を止めた。

「ここどこ？それに、白兔のたちのこと、皆敬ってるみたいだけど」

きよとん、とした後に、白兔は笑いだす。

「あたりまえじゃないですか、どの国でも同じですよ」

「そうなの？」

白兔は再び歩き出した。



中華風の建物は、あまり裝飾が派手でなく、そのかわりとても大きい。今通っている廊下も長く、通路は広い。白兔が通るたびにひれ伏す人々が端に避けやすいためにだらうか。

奏がきよろきよろとしながら歩いていたら、いつの間にか目的の場所に着いていたらしい。白兔が足を止めた。

「では、この宮女について行ってください」

「え？」

白兔の後ろには、二人の女が立っていた。そのうちの一人はさきほど出迎えていた女だった。

「わたくしはメイヤンでございます」

「フウレンでございます。先ほどお迎えに上がらせていただきました」

「あ、はい、覚えています」

二人の礼につられて、奏でも会釈をする。その様子に、白兔はクスリと笑った。

「では、メイヤン、フウレン、頼んだ」

「はい」

「白兔はいつしよじゃないの？」

奏の焦るような声に白兔が振り向く。

「私はあくまでも臣下です。御前と一緒にとはいきません」

「ええ……」

奏の溜息まじりの声に、白兔の眉が下がる。

「心配なさらずとも、命の危険がせまったときは、私がすぐ駆けつけます。では、私はこれで」

白兔がにこりと笑い、去っていく。奏は仕様がな、と肩を落とした。

「こちらですよ」

フウレンとメイヤンに連れられてきたのは、ひとつの部屋だった。がらんとしたなかに、ついたてが置いており、向こうで湯気が立っている。

「こちらでお召し物を御脱ぎになってください」

ついたての向こうには、寝台のようなものと、盥いっばいに張られたお湯があった。湯気の正体はこれだろう。

「お体を清めましょう」

「え、ちよつとまつて、清めるって!?!」

「言葉の通りです。さあ」

「はあ!?!」

抵抗する奏の服は、半ば強引にはぎとられ、結局思うが儘にされた。

「さあ、終わりましたよ」

「どうも…」

疲れ果てた奏を隅々まで拭いたメイヤンは、やりきつたというような、満足げな表情をしていた。

「あんなに抵抗されるとは思いませんでしたよ」

「ははは…」

乾いた笑いが漏れる。

「では、こちらにお召替えを」

フウレンが奏を手招く。奏は半分あきらめ、フウレンが好きなようにしてくれ、と呟いた。

## 〈第三幕〉 二節

「主!!」

部屋を出ると、そこに待っていたのは、従者を連れ、人の姿に戻った竜の氏と、白兔だった。

「白兔、竜の氏」

奏は、二人にまた会えたことに安心した。

「あれ、そういえば竜の氏はいつの間にもどっていたの?」

その質問に竜の氏は顔を逸らした。

「…あの時、服を山へおいて行ってしまったので…」

白兔が吹きだした。

「では、参りましょうか」

白兔の連れていた白髪の老人に連れられ、建物の階段を上る。

螺旋状になっている階段は、最上階に続いており、ところどころにある窓から木のとっぺんを眺めることができた。

「どこにむかっているの?」

白兔に聞いたはずだったが、奏の問いに答えたのは先頭に行く老人だった。

「議会議室ですよ。上で待っているのは長官のみですが…着きました」

老人が戸を四回叩くと、扉は開かれ、そこには玄関門と同じくひれ伏す人々がいた。

「わたしはここまででございます」

老人が脇によけ、礼をする。

「…あなたは入らないの？」

奏の純粹な問いに、老人は目を細めた。

「…大変、初お方でいらっしやる。よい主を選びましたね、卯の子様」

「…ありがとう」

照れているのか、白兔は微妙な顔をした。

「さ、早くお入りなさってください。長官たちがお待ちです」

奏は長官たちが道をつくるその先を見た。階段状になっていいるその上には王座なの

だろうか、大きく、そして細かな装飾が施された椅子が一つおいてあった。

「主、まだ階段を上ってはいけませんので、その手前で止まってください」

「うん…」

奏が歩くたびに、部屋に足音が反響する。それに緊張感が煽られ、鼓動の音が聞こえ

ていないか心配になった。

階段の前に着き、長官たちの前に立ちその姿を見る。せいせい十人ほどの、男と女が混ざったその面々を見渡す。

「表をあげよ！」

白兔の透る声で、布切れの音とともにそれぞれ顔を上げ、奏に視線が集まる。

「第二支国、旧名、令国。我が国に新しい国主が帰国なさった！まだ天生はなされてないが、天命を受けたことは確かである。故に、これからはこのお方が主上である！」

長官たちが再び頭を下げた。

その場の主役であるはずの奏は一言も、何も言えず、ただ白兔の隣で緊張していた。議会議室を出たころには、奏の疲労は限界まできていた。

「白兔、ねえ」

「どうされました？」

元気のない声に、心配そうに顔を覗き込む。

「少し、疲れたみたいで……休まない？」

「お疲れなら、少し横になるとよいでしょう」

竜の氏の言葉に白兔も頷いた。それに気づいた老人がそれなら、と道案内をする。

「主」

老人について行こうとする奏の足を止めたのは竜の氏だった。

「…何？」

見れば、竜の氏がおぶされとでも言いたいのか、屈みこんでいる。少し恥ずかしい気もしたが、疲れた今ではありがたい。

「…ありがとう」

その背中にのしかかると、竜の氏は軽々と立ち上がる。

「重くない？」

「私が主をこちらまで運んできたのですよ」

少し口調が尖っていた。

「…そんな主は、とても軽いですが」

「ふふ、ありがとう」

竜の氏の背中意外と大きい。体もしっかりとして見て目以上の力があるのだと納得できる。背中からはひと肌と、心地よい振動が伝わってきて、奏の疲労困憊の体に止めをさした。

「これからたくさんやる必要がありますよ。そのまえに、主はもう一人の支に会っていただかなくてはいけませんね。そうしないと…主？」

白兔の弾んだ声は奏に届くことなく流れるだけになった。

「…お休みになられている」

「この話はまた明日になりそうだな」

竜の氏の背中では、奏が一定のリズムで寝息を立てていた。

「……このお顔を見ている限りでは、普通の少女にしか見えないのになあ」

竜の氏の眩きに、白兔の顔がゆがんだ。

「本当にそうならいいのだが……」

「……は？」

奏の立つ場所には、明かりが一切なかった。

「暗い……のに」

自分の姿は見える。

どこを行くでもなく歩きはじめる。すると、遠くから、太い声が聞こえてきた。

「……主——っ!!どこにおられる!!」

「誰かいるのか!？」

その声のした方向に向かって叫ぶが、返事がない。再び同じ声が聞こえる。

「主——主——!!」

その声が近づき、足を止める。

だんだんと大きく、はつきりとなる声に、物言えぬ恐怖を感じた。

そしてその声は、耳元まで来ていたのだ。



「主!!」

振り向いた瞬間に視界に色が戻る。同時に肩に痛みが走り、そこを抑えた。ぬるりとした手のひらを見ると、そこに広がっていたのは自身の血。

「主!!」

「!」

声のした方向を見ると、傷だらけの男が奏を見つけ、走ってきていた。

「……(ハ)は」

周りを見渡せば、家々の焼けた跡や、転がる死体。どこかの軍旗らしきものがあつた。そして奏自身は、剣を握りしめ、革でできた厚い鎧を身に着けていた。

「主!!」

はっ、と顔を上げれば、男は目の前まで来ており、何かを言っている。

しかし、だんだんと視界はぼやけ、体を動かそうにも動かない。男の声が遠くになっていく。

「……お前は」

お前は誰で、ここは一体どこなんだ？

そう言い終わる前に、奏の意識は飛んだ。

## 〈第三幕〉 三節

「…誰だ」

「フウレンでございます」

寢言に答える声。聞こえた方を見ると、見知った顔がそこにあつた。フウレンはにこりと笑つた。

「おはようございます」

跳ね起き、寢癖を急いで整える。涎を垂らしていたことに気づき、顔が赤くなる。

「…おはようございます」

「はい、おはようございます」

奏の消え入りそうな声に構わず、フウレンは凜とした挨拶を返した。

「…今、何時ぐらいですか？」

「そうですね…竜の刻、ぐらいでしょうか」

「えつと…」

奏が指折り数えていると、戸を叩く音が聞こえてきた。

「何用ですか？」

フウレンの問いに、昨日聞いた声が返ってきた。

「メイヤンでございます。お召し物をお持ちしました」

その手にあつたのは、緋色の生地金刺繍が施された服だった。

「…あ、おはようございます主！」

部屋を出ると、一番に白兔の声が飛んできて、その後から白兔の連れだ徒者たちの控えめで上品な挨拶が聞こえた。白兔は、今日は白く艶のある長髪を高い位置で、ひとつにまとめている。丁度、奏の髪形と同じだ。

「おはよう白兔。今日は髪形が違うね」

「はい！クモクにしてもらったんですよ」

「クモク？」

奥で、黒髪に深緑色の髪留めを付けた男がお辞儀をした。

「よかったね」

「主と、おそろいですね！」

白兔が嬉しそうに笑い、まとめられた髪を揺らした。

「では、行きましょう。竜の氏も待っています。こちらですよ」

白兔が案内した先は、建物の中庭に当たるところで、綺麗に手入れされた花々はもちろん、目をこらせば遠くに畑が見える。中庭と言うより、球戯場や、グラウンドのよう

な感じで広がった。

「広いですよね」

「え？」

中庭をぼんやりと見ている奏に白兔が気づく。

「……ここは、先代の王、令王様が特にこだわった場所なんですよ。この花々や樹木、どれも見事ではないですか？一流の庭師が手入れを毎日かかさずしているんです」

「へえ。じゃあ、あれも？」

奏が指を指した畑を見て、白兔は、ああ、と声を漏らした。

「あれは令王様のご友人のためだとか」

「友人？」

「はい。……といっても、そのご友人は令王様が即位なさる前に、すでに……あ、着きましたよ」

中庭の奥にある屋根のついたはなれに、その臣下、竜の氏はいた。こちらに気付かないのか、従者と話しながら茶を飲んでいいる。

「……竜の氏」

奏が口の中で呟くと、聞こえたのか、竜の氏が振り返り深い礼をする。

「聞こえたの？」

竜の氏が頷く。

驚く奏を見て、白兔がくすりと笑った。

「聞こえますとも。竜の氏は臆病な支ですから」

はなれに着いた頃には、竜の氏の顔は不機嫌であることを明らかにしていた。

「おはようございます、主。卯の子も、おはよう」

「おはよう」

「おはよう。で、どうしてそんなに不機嫌そうなんだ？」

「…俺には聞こえてるからな」

竜の氏の眉がよる。

「…俺が臆病なのは、詮方ないんだ」

「知っておるとも」

白兔が愉しそうに笑った。

二つある席のうち、ひとつに奏、もうひとつに白兔が座る。二人にも茶が注がれ、話しが始まった。

「さて、昨今も言うとおおり、主にはやるのが山とあります。ですが、最初に、正式にこの国の国主となつてもらわねばいけません」

「正式に？」

「はい。私たちが主であるとはわかったからと言って、民衆が全て『うん』というとは限りません。天生しなければいけないのです」

白兔の言葉に竜の氏が続ける。

「この国の民の主は、あなた様であると同時に、すべてを統べる神でもありません」

白兔が頷く。

「然り、主が神に認められたお方であると、示さなければなりません。それを、天生といえます」

「天生…白兔とはしたよね？」

「は？」

「白兔とは、出会った時にもうしたんだよ？ねえ？」

「…卵の子、それは真か？」

「いや、その…」

竜の氏の白兔を見る目が険しくなる。白兔は目を逸らした。

「…いろいろと、訳があったんだ」

「ほう…」

「…と、とにかく！その天生とはですね、私たち主に仕える支、全員と行わなければならないのです！」

「…そして、その支は全員で三人、存在します」

「三…あれ？もう一人がいらないけど」

「それが問題なのです」

白兔の顔が曇る。

「…私たち支には、共通の情報網のような、連絡手段があり、普通は常に意思疎通をはかっているものです。実際に私たちもそうでした」

「でしたってことは…今は」

「…今、お仕えするはずの支、虎の氏が、行方知れずなのです」

「虎の氏…」

呟いたその時、頭に鈍い痛みが走った。奏の眉間にしわができる。しかし、その痛みは一瞬ですぐに収まり、奏はそれが幻覚のようなものだ、一口茶をすすする。白兔は、その表情の変化を見逃してくれはしなかったが。

「主、どうされました」

白兔の言葉に、茶器を持つ奏の指がピクリと動いた。

「…何が？」

「いえ。一瞬、お顔が陰ったようにお見受けしたので」

竜の氏も心配そうな表情をつくる。奏は茶器を置き、にこりと笑った。

「…何の心配もいらぬよ。それより、虎の氏の話は？」

「ええと…まあ、結論は虎の氏を見つけないければ主の天生が終わらないので、はやく見つけてしまおう、と言う訳です」

「なるほどね」

奏が席を立つと、白兔も席をたつた。

「主、どこに？」

「またもや心配そうに竜の氏が訪ねてくるのを、奏は笑顔で返した。

「決まってるでしょ？虎の氏を探しに行くのよ」

「しかし、そのようなことは、臣下の我々が行います。迷子の搜索など、主がすべきことではありません」

竜の氏の必死の講義に、奏は肩をすくめた。

「…だけど」

「なりません」

奏の言葉が終わる前に、竜の氏が食らいつく。それに少しの苛立ちを感じ、奏の体はある一種の本能によって動く。

「竜の氏」

「…なんででしょう」



奏からの緊張を感じ取ったのか、竜の氏の肩が少し揺れる。白兔はその様子を横目にじつと見ていた。

「…あなたが私のことを主と呼ぶのは、私が真の主だと、そう信じてるからでしょ？」  
「…」

突然の質問に、竜の氏は瞬きを繰り返すだけで、一言も発せなかった。

「そうして信じられているのは、とてもうれしいことだよ。でもね、その気持ちに答えるようなことをしたいと、同時に思うの」

竜の氏が頷く。

「…私は、私の臣下を見つけることのできないような主でありたくない。自分の臣下を他人の手に任せて、そうして登ることのできる王座なんて、それはただの虚空だと思う。そんなものは、私には必要ない」

目線を逸らした竜の氏の瞳が、常盤から紫色に変わる。角度によって違う色に見えるその瞳は、今は動揺だけを映していた。

「それとも、その覚悟を砕いてまで他人に任せると言うのなら、私はそうする」

「主、私は…」

竜の氏の言葉が途切れる。奏と一瞬目が合ったのを、逸らした。

「…白兔は？どう思う？」

「…私は」

今まで黙り込んでいた白兔の口が動いた。そのせいも、少し口が渴いている。

「…私は、主の言うことに異論はありません。しかし、竜の氏も、ただ主を止めようとしたわけではありません。主の御身に大事があつたら、まっさきに傷つくのは私たちでも、政治でも、ましてや国でもありません。民です。民は主にすべてを捧げているようなものです。それを忘れては、いけません」

奏が小さくうなずいた。

「そして、竜の氏は言葉が足りない」

「…以後気を付けよう」

咳払いをした竜の氏は、まだ少し落ち込んでいるようだった。

「では、主のお言葉通り、虎の氏は我々で探しましょう」

「そうと決まれば、はやく準備をしなくてはいけませんね！」

竜の氏は、では、と一礼をするとそのまま立ち去っていき、その後を二、三人の宮女や下官が小走りで追いかける。

「…なんであんなに急いでるんだろう」

奏の疑問符に、白兔の小さな声が答える。

「あれ、竜の氏泣いてるんですよ」

すると、遠くの方から竜の氏の「卯の子！」という声が聞こえた。

「…泣いていたのか。そんなに怖がらせちゃったのかな」

冗談交じりのつもりで言ったそれに、白兔が真面目な声音で答える。

「…はい。主は分からないでしょうが、私たちにあって、主の怒りをかうことは死を意味します」

「…大袈裟な」

奏の苦笑に、首を振る。

「大袈裟ではありません。いくら力の強い支でも、主からの攻撃はかわせず、受け止めることもできず、そのまま傷つきます。それは言葉も同様で、主の言葉に、支は逆らえません。例えば、主が『死ぬ』と言えば私たちは簡単に死に至ります。本当に簡単なことです。従えば死、逆らっても生きた心地はしません。…それほど私たちは単純で臆病であり、言葉は刃物よりも鋭いのです」

「…私は、少し言い過ぎたのかな」

励ますように奏の手を白兔が握る。

「次から気を付ければようございませう。今話を忘れないことも大切です」

うん、と無言で頷いた奏に、白兔が笑う。そしてそのまま、口を開く。

「主」

「ん?」

白兔から笑顔が消えた。

「…何か隠していませんか」

一瞬で血の気が引いた。心なしか握られた手の力も強くなつた気がする。

なにか、いつどこかで、どの場面でそう感じたのだろうか。奏の思考のうち辿り着いたのは、その質問を打ち返すことだけだった。

「…どうして?」

怪訝な顔で返した奏の瞳を、じつと白兔が見つめる。深層を眺めるように。その間はあまり長くなく、白兔の手が離れると同時に、いつもの笑顔が戻ってくる。

「なんとなくですよ、主」

白兔がはなれの屋根からでて、止まり、そして振り返った。

「いいですか、絶対、忘れてはいけませんよ?」

「…言葉は刃物より鋭いってこと?」

「(名答でございませす!」

愉快そうに笑う白兔は、はなれをあとにした。残った奏の手には、白兔の手の感触がまだ残っていた。

「…本当に、臆病で単純な生き物が、あんな表情するわけないでしょ」

記憶に深い爪痕を残した白兔の表情。目の光は隠れ、何かを、深いところまで探り、えぐるような視線。

「…あんな顔もするんだ」

フウレンが注いでくれたお茶を、もう潤ったと言つて、下げてもらおう。虎の氏を探すために準備をしようと、フウレンとメイヤンの二人を手伝いを頼んだ。

奏の口は渴いていた。

## 〈第三幕〉 四節

宮殿の門にたどり着くと、そこにいたのは白兔だけだった。その白兔も白い布を頭に巻き、髪や顔を隠しているようだった。

「白兔……だよね？」

声に明るい笑顔で振り返ったのは正真正銘、その少女だった。

「その恰好、どうしたの？」

奏の問いにきよとんとした表情をした白兔は、「ああ」と声を漏らすと、頭の布を取り去った。布の下からは、いつもの白髪が見える。

「私たちの毛並みは普通の人間とは大きく異なるのです。ですから、こうして髪を隠し、支であるということが分からないようにしているんですよ」

「ふうん……」

白兔が布を巻いていると竜の氏が門へやってきた。

「お待たせして申し訳ありません」

「遅いぞ」

叱咤を食らう竜の氏の恰好は、頭に布を巻いていない。

「竜の氏は一緒に行かないの?」

それどころか、奏や白兔のように質素で、動きやすい服でもない。先ほどと同じ、あでやかな衣装を身に纏っている。

「私は宮内の執務と防衛を。一緒に行くことができないことは残念ですが、これも立派な、臣下としての務めなので」

「そっか…」

「留守は任せたぞ」

「…気を付けて行つてらっしゃいませ」

竜の氏は門が完全に閉まるまで、奏たちを見送っていた。

門を出てからは、長い階段が続いた。左右は木が生い茂っていて、風が吹き抜けるたびに、カラカラと木の葉の音がする。

「主、街に着いたらアシを買いましょう」

「アシ?」

階段の行きつく先には二人の門卒が槍を構えて立っている。下りてきた奏たちを敬礼とともに送り出してくれた。白兔はにこりと笑い、頷いた。

「はい。馬、または市に売り出された獣など。主は、どちらがよろしいですか?」

「うーん……」

アシ、イコール、馬。ということは、移動手段の「足」のことだろうか。

「……どっちでもいいけど、できれば、懐いてくれるのがいいかな」

奏の言葉になるほど、と呟くと、錢入れを確認し始める。

「我々の財産から考えると、闇市で獣を競り落とすのは不可能ですね」

「闇市？」

驚く奏にし、と人差し指を口に当てる。

「あまり良い話ではないので。闇市は第二支国では一応禁止されているんです」

「……いい、一応って」

「それで家族を養うものや、己を生かすものもあります。なので、こちら側としては目を瞑っているんです」

なるほど、と奏が頷く。

「まあ、あまり派手に動くようなら何の躊躇なく潰しますけどね」

にこりと笑った白兎の目は、笑っていないかった。

街は活気あふれる声が響き、にぎわっている。大通りを挟み、赤を基調とした建物がならんでいる。中華風の通りは、日本の小さな中華街とは違う、本物の、電飾など一つもない歴史のなかのそれそのものだ。



飲食店、宿、宝玉、民家。現実味のない街を、奏はきよきよとあたりを見回しながら歩いた。

「…白兔、ここが街、なの？」

白兔がくすりと笑う。

「そんなによそ見をしていては、転んでしまいますよ」

まさにフラグ。

白兔の言葉を待っていたかのように馬車が後ろから迫っていたのだ。

「主ー」

白兔の手が奏の手を引き、幸い怪我はなかったものの、白兔の白い髪が曝け出てしまった。

「！」

馬車からの風で飛んでいってしまったその布は、大通りに音もなく落ちた。

「…あ」

「白兔、髪が…」

奏と白兔を残して静まり返る周囲。馬車が喧騒を攫っていったかのように。そして白兔が集まる視線。

明らかに異常な場に飛び込んできたのは、馬車の扉を乱暴に開ける音。

「…つめえ、どこ見て歩いてんだ!!」

当たり屋のお手本のような男は、がたいもよい、強面の屈強そうな若者だったが、白兎を見るなり表情をかえ、強面はどこにいったのか、眉を下げ、その場にひれ伏した。

「と、とんだご無礼を!!お許しください、卯の子様!!」

その情けない声を合図に、周囲にいた全員の老若男女が膝をつき、頭を地面につける。馬車を通った後で砂埃がたつ中、せき込むものも必死でそれをこらえた。白兎は苦虫を噛み潰したような顔で、ひたすら馬車の男を見ていた。

「…表を上げろ」

白兎の小さな声には誰も反応を示さない。いや、示せないのだ。

お忍びで街に来ていた上様の邪魔をしてしまった罪は、重い。

「…お前」

白兎の低い声にびくりと肩を震わせたのはその場の全員。特に、馬車の男だった。

「表を、上げろ」

恐る恐る白兎を覗き見るその顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。奏も目を逸らし、哀れむほどだ。

「…も、もうしわけありません…」

「まだ何も言っていない」

「す、すませ…」

がたがたと震える男の服は、背中と脇が汗染みを大きく作っていた。

「…はあ」

白兔の溜息に、男の短い悲鳴が漏れる。

「…ここが、御前のすぐ下にある街だとわかっているのか？」

「は、はい…」

男の震えが大きくなる。

「では、ここで馬車を使つてはならぬことも知っているだろう？」

「あ、す、すいませ…」

「すいませんではない。…ここで馬車を使わぬ理由は、知っておるのか？」

「こ、国主様の、とと、通り道だから…」

「だから？」

「だから…そ、その…こ、国主様に、お、お、お命の危険がおよ、及ばぬように…」

「…正解半分、といったところだろうな」

短く息を吐くと、男の短い悲鳴がまた聞こえた。

白兔が振り向き、じつとこつちを見てきた。こつちに來てほしいと言う事なのだろう

か。奏が踏み出そうとした瞬間に、その体は倒れた。

「!?」

「あんた、早く伏せな!」

奏の頭を押さえたのは、中年の女性で、白兔の視線が奏を見ているのが気になったのだろう。奏の態度のせいだと勘違いしてしまい、お節介にまかせて奏の体を引き、頭を地面にこすり付ける。

「い、いた…」

「何してるんだい!」

「…主」

奏の上の手を見た白兔の血流は急激に逆流した。

「このっ…無礼者があつ!!」

「…?」

頭の上の重みが無くなった奏が見上げると、額に血管を浮かせた白兔が、息を荒げて立っていた。その視線の先には、先ほどまで隣にいたはずの中年女性が、投げ飛ばされていた。その先の人々も巻沿いを食らっている。

「白兔!…っ!?!」

気づけば、白兔のみでなく、奏自身も同じような恐怖の視線を向けられている。

このままではまずい。奏は、完全にトんでいる白兔の目の前で、ぱん、と拍を打った。

「つ！」

「白兔、やめなさい！」

驚いた顔はすぐ青くなり、自分が投げ飛ばした女を見て、あ、と呟いた。

「主、私は……」

「大丈夫、落ち着いて。とりあえずここから離れよう、ね？」

こくんと動いた首は、小さい子供の動きのそれだ。

見た目はこんなにも細く、小さいのに。奏は後頭部を搔いた。

「えっと、あの、すいません」

奏が話しかけた男は、まだがくがくと震えている。そんな姿に少し申し訳なくなってしまう。

「あなたの馬車の馬を、いただけませんか？」

「え？」

以外、とても言いたげな表情は、自分が罰せられるとても思っていたからだろう。

「だから、馬が欲しいんです。一頭」

「一頭」

ぼかんとしている男はオウム返しをして、間を置いて立ち上がった。

「す、すぐに！」

「ありがとうございます」

男が砂埃を立てながら馬車に走り寄っていく。その後を奏がついて行こうとして、ふと振り返ると白兔の姿がない。

「…あれ？」

あたりを見回すと、白兔はあの中年女性の怪我を直していた。患部に重なる白兔の手から、白い光が見える。

光が消えると、白兔は立ちあがった。患部には傷一つ残っていない。

「…よし、もう痛みはないだろう」

「あ、ありがとうございます」

白兔の脱力した笑顔は、申し訳なさからだろう。

「お嬢さん！」

馬車の男の声にはつとなり、奏はつま先の向きを変えた。

「こいつでよろしいでしょうか」

手綱の先の馬は、大きく、手入れされたきれいな毛並みの黒馬だ。主人に構ってもらえるのが嬉しいのか、尻尾を振っている。

「それが一番いい馬なのか？」

いつの間にか話に入ってきた白兔に声をかけられ、男はまたびくりと震えた。

「は、はい！一番足も速く穏やかなやつです。人間が大好きで。俺にすごく懐いてるんです。だからきつと…」

「そうか」

馬を撫でながら目を瞑る。

「…きつと、いい乗り物になりますよ」

男が悲しそうに笑った。ゆつくりと目を開いた白兔が、馬に話しかけた。

「…よい主人を持ったな」

男が、顔を上げる。今にも泣きそうな顔をして、手綱を強く握りしめた。その手も開き、白兔に手綱が渡される。

「…すまない」

少し寂しい笑顔に、男の涙があふれる。

「…ありがとうございます」

男の首が垂れた。

「行きましょう、主」

「…うん」

奏を馬に乗せ、自分も馬に乗る。手綱を掴み、白兔はまだ平伏す人々に大きな声を注いだ。

「騒がせてすまなかつた。怪我をさせた者も、本当に申し訳ない  
それと、と白兔が男を振り返る。

「馬を預けてくれて感謝する。今日は罪を問わない、早く帰れ」

「お、お心に感謝いたします…！」

「それから…次に会った時には、こいつは返そう。約束する」

白兔が馬を撫でる。男は何とも言えない表情で、その場に平伏した。

「…では主、行きましよう。私に掴まっついてくださいね」

「い、い、い？」

奏の腕が腰にまわされたのを見て、白兔が頷く。

「では、参りましようか」